80
80-2041
1200501321951
2041

始

福翁自傳

時事新報社

帝國圖書館藏

福翁百話一

宇宙

福澤諭吉

宇宙の議論は之を造化なるものゝ又は自然に出来たるものゝとは宗教論の喧しき所なれ
ども其議論は姑く擱き我輩に於ての[redacted]
唯今の宇宙の表面を観して其無辺
無量広大[redacted]構造の微密緻妙なる其紡密の堅固不抜なる[redacted]感心するのみならず之を思
へば思ふ程いよいよ際限なく唯独り茫然として止むのみ見る所も聞く所も広大無辺な
る有様を神の力と云ふ者もあり如来の徳と云ふ者もあり造物主なりと云ひ物の有様
は何れにも吾々人間の五官に触れ精神に感じながら其名なくして其状不都合なれども
左ればとて我輩は其神を知らず其如来を知らず之れが為に神とも如来とも唱へずして
漠然と之を名けて天と云ひ吾々[redacted]が幼少の時より人の力に叶はぬ事[redacted]達天なり天道なりと言ひ
慣はしたる習慣[redacted]に依り此天の字を用ひて宇宙現存の有様を代表せしむるものなり
天と云ひ又は天道天工天意など云ふは即ち其天とは
なり[redacted]吾々の仰ぎ見る青空のみならず又太陽のみならず唯宇宙
に行はるゝ無量無辺無始無終至細至[redacted]強至[redacted]大の有様を天の文字に托するなれ
ども人智を以て測る可らざる不可思議の
の意にして是れば人々の思ひ／＼夏々に穏当ならざる文字も何らぬ会釈なく之を改めて可
なり抑も文字は仮りに定めて天と定めて其広大[redacted]有力なるの唯吾々人間の想像外に[redacted]
[redacted]人間の見る所の山も高し海も深しと云ふ其の観も唯是れ地球上の物にして此地球は
太陽に屬する一小土塊たるに過ぎず又其太陽も恒星中の一粒にして天に懸れる星は粒々
皆太陽ならざるはなし其数の夥多にして測る可らず許る可らず其の銀河の白きは即ち恒星
の重なり／＼て白く見ゆるものにして無数の[redacted]の星の重なりて遠く眼にて唯黒々と見ゆ
るが如し是れが限りなと思へば銀河一帯の一群の外に又ス[redacted]きとて白き斑痕の見ゆる所
あるものありて此斑痕も亦恐らくは吾々の銀河一帯の如く自ら[redacted]恒星等の一群なる可
[redacted]又其遠近を算するにスペクトルは
始んど虚空を星帯一条の恒星にても何千万億の数
を以て計る可らず遠きものは其星より光を放て光線の地球に達するまでに何百万年
を要する所もありと云ふ故に恒星の中にて既に百万年前に本体を失ひ今は唯其の光線の
み吾人の眼に映ずるものも何ぞ知らん又百万年前既に消えし星の体を取りて今日尚は其状

80-204

慶應義塾の社中にては西洋の學者に往々自から傳記を記すの例あるを以て兼てより福澤先生自傳の著述を希望して親しく之を勸めたるものありしかども先生の平生甚だ多忙にして執筆の閑を得ず其儘に經過したりしに一昨年の秋或る外國人の需に應じて維新前後の實歴談を述べたる折、風と思ひ立ち幼時より老後に至る經歴の概略を速記者に口授して筆記せしめ自から校正を加へ福翁自傳と題して昨年七月より本年二月までの時事新報に掲載したり本來この筆記は單に記憶に存したる事實を思ひ出づるまゝに語りしものなれば恰も一場の談話にして固より事の詳細を悉くしたるに非ず左れば先生の考にては新聞紙上に

掲載を終りたる後更らに自から筆を執て其遺漏を補ひ又後人の參考の爲めにとて幕政の當時親しく見聞したる事實に據り我國開國の次第より幕末外交の始末を記述して別に一編と爲し自傳の後に付するの計畫にして既に其腹案も成りたりしに昨年九月中遽に大患に罹りて其事を果すを得ず誠に遺憾なれども今後先生の病いよ〳〵全癒の上は兼ての腹案を筆記せしめて世に公にし以て今日の遺憾を償ふことある可し

明治三十二年六月　時事新報社　石河幹明記

福翁自傳目次

幼少の時……一
長崎遊學……三三
大阪修業……六一
緒方の塾風……九四
大阪を去て江戸に行く……一五三
始めて亞米利加に渡る……一七〇
歐羅巴各國に行く……二〇七
再度米國行……二六八
王政維新……二八五

暗殺の心配……三六三
雜記……三八三
○一身一家經濟の由來……四一八
品行家風……四七一
老餘の半生……四九九

目次終

福翁自傳

福澤諭吉口述
矢野由次郎速記

幼少の時

福澤諭吉の父は豐前中津奥平藩の士族福澤百助、母は同藩士族橋本濱右衞門の長女名を於順と申し父の身分はヤット藩主に定式の謁見が出來ると云ふのですから足輕よりは數等宜しいけれども士族中の下級、今日で云へば先づ判任官の家でせう藩で云ふ元締役を勤めて大阪にある中津藩の倉屋敷に長く勤番して居ました夫れゆゑ家內殘らず大阪に引越して居て私共は皆大阪で生れたのです、兄弟五人總領の兄の次に女の子が三人、私は末子、私の生れたのは天保五年十二月十二日

父四十三歳、母三十一歳の時の誕生ですソレカラ天保七年六月父が不幸にして病死、跡に遺るは母一人に子供五人、兄は十一歳私は數へ年で三つ、斯くなれば大阪にも居られず兄弟殘らず母に連れられて藩地の中津に歸りました

扨中津に歸てから私の覺えて居ることを申せば私共の兄弟五人はドウシテも中津人と一所に混和することが出來ない、其出來ないと云ふのは深い由縁も何もないが從兄弟が澤山ある父方の從兄弟もあれば母方の從兄弟もあるマア何十人と云ふ從兄弟がある又近所の子供も幾許もある、あるけれども其者等とゴチヤクチヤになることは出來ぬ第一言葉が可笑しい私の兄弟は皆大阪言葉で中津の人が「さうぢやちこ」と云ふ所を私共は「さうでおます」なんと云ふやうな譯けでお互に可笑しいから先づ話が少ない、夫れから又母は素と中津生れであるが長く大阪に居たから大阪の風に慣れて子供の髮の鹽梅式、着物の鹽梅式、一切大阪風の着物より外にない、有合の着物を着せるから自然中津の風とは違はなければならぬ着物が違ひ言葉が違ふと云ふ外には何も原因はないが子供の事だから何だか人中に出るのを氣耻かしいやうに思て自然内に引込んで兄弟同士遊んで居ると云ふやうな風でした夫れから最う一つ之に加へると私の父は學者であつた普通の漢學者であつて大阪の藩邸に在勤して其仕事は何かといふと大阪の金持加島屋、鴻ノ池といふやうな者に交際して藩債の事を司どる役であるが元來父はコンナ事が不平で堪らない金錢なんぞ取扱ふよりも讀書一偏の學者になつて居たいといふ考であるに存じ掛もなく算盤を執て金の數を數へなければならぬとか藩借延期の談判をしなければならぬとか云ふ仕事で今の洋學者とは大に違つて昔の學者は錢を見るも

汚れると云ふて居た純粋の學者が純粋の俗事に當ると云ふ譯けであるから不平も無理はない、ダカラ子供を育てるのも全く儒教主義で育てたものであらうと思ふ其一例を申せば斯う云ふことがある私は勿論幼少だから手習どころの話でないが最う十歳ばかりになる兄と七八歳になる姉などが手習をするには倉屋敷の中に手習の師匠があつて其家には町家の子供も來る其處でイロハニホヘトを教へるのは宜しいが大阪の事だから九々の聲を教へる二二が四、二三が六これは當然の話であるが其事を父が聞て、怪しからぬ事を教へる幼少の子供に勘定の事を知らせると云ふのは以ての外だ斯う云ふ處に子供は遣て置かれぬ何を教へるか知れぬ早速取返せ」と云て取返した事があると云ふことは後に母に聞きました何でも大變喧ましい人物であつたことは推察が出來る其書遺したものなどを見れば眞實正銘の漢儒で殊に堀河の伊藤東涯先生が大信心で誠意誠心屋漏に愧ぢずと云ふと許り心掛たものと思はれるから其遺風は自から私の家には存して居なければならぬ一母五子他人を交へず世間の附合は少く明ても暮れても唯母の話を聞く許り父は死んでも生きてるやうな者ですソコデ中津に居て言葉が違ひ着物が違ふと同時に私共の兄弟は自然に一團體を成して言はず語らずの間に高尙に構へ中津人は俗物であると思て居て夫等の者のすることは一切咎めもせぬ多勢に無勢咎立をしやうと云ても及ぶ話でないと諦らめて居ながら心の底には丸で歯牙に掛けずに云はゞ人を馬鹿にして居たやうなものです今でも覺えて居るが私が少年の時から家に居て能く饒舌りもし飛び廻はり刎ね廻はりして至極活潑にてありながら木に登ることが不得手で水を泳ぐことが

皆無出來ぬと云ふのも兎角同藩中の子弟と打解けて遊ぶことが出來ずに孤立した所爲でせう

今申す通り私共の兄弟は幼少のとき中津の人と言語風俗を殊にして他人の知らぬ處に隨分淋しい思ひをしましたが其淋しい間にも家風は至極正しい嚴重な父があるでもないが母子睦じく暮して兄弟喧嘩など唯の一度もしたことがない、のみか假初にも俗な卑陋な事はしられないものだと育てられて別段に教へる者もない母も決して喧しい六かしいんでないのに自然に爾うなつたのは矢張り父の遺風と母の感化力でせう其事實に現はれたことを申せば鳴物などの一條で三味線とか何とか云ふものを聞かうとも思はなければ何とも思はぬ斯樣なものは全體私なんぞの聞く可きものでない况や玩ぶべき者でないと云ふ考を持て居るから遂ぞ芝居見物など念頭に浮んだこともない

例へば夏になると中津に芝居がある祭の時には七日も芝居を興行して田舍役者が藝をする其時には藩から布令が出る、芝居は何日の間あるが藩士たるものは決して立寄ることは相成らぬ住吉の社の石垣より以外に行くことならぬと云ふ其布令の文面は甚だ嚴重なやうにあるが唯一片の御布令だけの事であるから俗士族は脇差を一本挾して頰冠りをして颯々と芝居の矢來を破て這入る若しそれを咎めれば却て叱り飛ばすと云ふから誰も怖がつて咎める者はない町の者は金を拂て行くに士族は忍姿で却て威張て只這入て觀る然るに中以下俗士族の多い中で其芝居に行かぬのは凡そ私のところ一軒位でせう決して行かない、此處から先きは行くことはならぬと云へば一足でも行かぬ、どんな事があつても私の母は女ながらも遂ぞ一口でも芝居の事を子供に云はず兄も亦行かうと云はず家内中一寸でも話がない夏暑い

時の事であるから凉には行く併し其近くで芝居をして居るからと云て見やうともしない、どんな芝居を遣て居るとも噂にもしない平氣で居ると云ふやうな家風でした

前申す通り亡父は俗吏を勤めるのが不本意であつたに違ひない、左ればれば中津を蹴飛して外に出れば宜い所が決してソンナ氣はなかつた樣子だ、如何なる事にも不平を呑んでチャンと小祿に安んじて居たのは時勢の爲めに進退不自由なりし故でせう私は今でも獨り氣の毒で殘念に思ひます例へば父の生前に斯う云ふ事がある今から推察すれば父の胸算に福澤の家は總領に相續させる積りで宜しい所が子供の五人目に私が生れた其生れた時は大きな瘠せた骨太な子で產婆の申すに此子は乳さへ澤山呑ませれば必ず見事に育つと云ふのを聞て父が大層喜んで是れは好い子だ此子が段々成長して十か十一になれば寺

に遣つて坊主にすると每度母に語つたさうです其事を母が又私に話してアノ時阿父さんは何故坊主にすると仰つしやつたか合點が行かぬが今御存命なればお前は寺の坊樣になつてる筈ぢやと何かの話の端には母が爾う申して居ましたが私が成年の後その父の言葉を推察するに中津は封建制度でチャント物を箱の中に詰めたやうに秩序が立て居て何百年經ても一寸とも動かぬと云ふ有樣、家老の家に生れた者は家老になり足輕の家に生れた者は足輕になり先祖代々家老は家老、足輕は足輕、其間に挾まつて居る者も同樣何年經ても一寸とも變化と云ふものがない、ソコデ私の父の身になつて考へて見れば到底どんな事をしたつて名を成すことは出來ない世間を見れば茲に坊主と云ふものが一つある、何でもない魚屋の息子が大僧正になつたと云ふやうな者が幾人もある話、それゆゑに父が私を坊主にすると云たのは其

意味であらうと推察したことは間違ひなからう如斯なことを思へば父の生涯四十五年の其間、封建制度に束縛せられて何事も出來ず空しく不平を呑んで世を去りたるこそ遺憾なれ又初生兒の行末を謀り之を坊主にしても名を成さしめんとまでに決心したる其心中の苦しさ其愛情の深さ私は毎度此事を思出し封建の門閥制度を憤ると共に亡父の心事を察して獨り泣くことがあります私の爲めに門閥制度は親の敵で御座る

私は坊主にならなかつた坊主にならずに家に居たのであるから學問をすべき筈である所が誰も世話の爲人がない私の兄だからと云て兄弟の長少僅か十一しか違はぬので其間は皆女の子、母も亦たつた一人で下女下男を置くと云ふことの出來る家ではなし母が一人で飯を焚いたりお菜を拵へたりして五人の子供の世話をしなければならぬから中々敎育の世話などは存じ掛もない云はヾヤリ放しである藩の風で幼少の時から論語を讀むとか大學を讀む位の事は遣らぬことはないけれども奬勵する者とては一人もない殊に誰だつて本を讀むことの好な子供はない私一人本が嫌ひと云ふこともなからう天下の子供みな嫌ひだらう私は甚だ嫌ひであつたから休でばかり居て何もしない手習もしなければ本も讀まない根つから何にもせずに居た所が十四か十五になつて見ると近所に知て居る者は皆な本を讀で居るのに自分獨り讀まぬと云ふのは外聞が惡いとか耻かしいとか思たのでせう、夫れから自分で本當に讀む氣になつて田舍の塾へ行始めました、どうも十四五になつて始めて學ぶのだから甚だきまりが惡い外の者は詩經を讀むの書經を讀むのと云ふのに私は孟子の素讀をすると云ふ次第である所が玆に奇な事は其塾で蒙求とか孟子とか論語とかの會讀

講義をすると云ふことになると私は天稟少し文才があつたのか知らん能く其の意味を解して朝の素讀に教へて呉れた人と晝からになつて蒙求などの會讀をすれば必ず私が其先生に勝つ、先生は文字を讀む許りで其意味は受取の惡い書生だから之を相手に會讀の勝敗なら譯けはない其中、塾も二度か三度か更へた事があるが最も多く漢書を習たのは白石と云ふ先生である其處に四五年ばかり通學して漢書を學び其意味を解すことは何の苦勞もなく存外早く上達しました白石の塾に居て漢書は如何なるものを讀だかと申すと經書を專らにして論語孟子は勿論すべて經義の研究を勉め殊に先生が好きと見えて詩經に書經と云ふものは本當に講義をして貰て善く讀みましたソレカラ蒙求世說左傳戰國策老子莊子と云ふやうなものも能く講義を聞き其先きは私獨りの勉強、歴史は史記を始め前後漢書晉書五代史元明史略と云ふやうなものも讀み殊に私は左傳が得意で大概の書生は左傳十五卷の內三四卷で仕舞ふのを私は全部通讀凡そ十一度び讀返して面白い處は暗記して居た夫れで一ト通り漢學者の前座ぐらゐになつて居たが一體の學流は龜井風で私の先生は龜井が大信心で餘り詩を作ることなどは教へずに寧ろ冷笑して居た廣瀨淡窓などの事は彼奴は發句師、俳諧師で詩の題さへ出來ない書くことになると漢文が書けぬ何でもない奴だと云て居られました先生が爾う云へば門弟子も亦爾う云ふ氣になるのが不思議だ淡窓ばかりでない頼山陽なども甚だ信じない誠に目下に見下して居て「何だ粗末な文章、山陽などの書いたものが文章と云はれるなら誰でも文章の出來ぬ者はあるまい假令ひ舌足らずで吃た所が意味は通ずると云ふやうなものだなんて大造な劍幕で先生から爾う教込まれたから私共も山陽外史の事をば輕く見て

居ました白石先生ばかりでない、私の父が又その通りで父が大阪に居るとき山陽先生は京都に居り是非交際しなければならぬ筈であるに一寸とも付合はぬ野田笛浦と云ふ人が父の親友で野田先生はどんな人か知らないけれども山陽を疏外して笛浦を親しむと云へば笛浦先生は浮氣でない學者と云ふやうな意味でしたか筑前の龜井先生なども朱子學を取らずに經義に一說を立てたと云ふから其流を汲む人々は何だか山陽流を面白く思はぬのでせう

以上は學問の話しですが尚ほ此の外に申せば私は舊藩士族の子供に較べて見ると手の先きの器用な奴で物の工風をするやうな事が得意でした、例へば井戸に物が墜ちたと云へば如何云ふ鹽梅にして之を揚げるとか簞笥の錠が明かぬと云へば釘の尖などを色々に枉げて遂に見事に之を明けるとか云ふ工風をして面白がつて居る又た障子を張ることも器用で自家の障子は勿論親類へ雇はれて張りに行くこともある兎に角に何をするにも手先が器用でマメだから自分にも面白かつたのでせう、ソレカラ段々年を取るに從て仕事も多くなつて固より貧士族のことであるから自分で色々工風して下駄の鼻緒もたてれば雪駄の剝れたのも縫ふと云ふことは私の引受けで自分のばかりでない母のものも兄弟のものも繕ふて遣る、或は疊針を買て來て疊の表を附け替へ又或は竹を割つて桶の箍を入れるやうな事から其外戶の破れ屋根の漏りを繕ふまで當前の仕事で皆私が一人でして居ました、ソレカラ進んで本當の内職を始めて下駄を拵へたこともあれば刀劍の細工をしたこともある刀の身を磨ぐことは知らぬが鞘を塗り柄を卷き其外金物の細工は田舍ながらドウヤラカウヤラ形だけは出來る今でも私の塗た虫喰塗りの脇差の鞘が宅に一本あるが隨分不器用なも

のです都てコンナ事は近處に內職をする士族があつて其人に習ひました金物細工をするに鑢は第一の道具で是れも手製に作つて其製作には隨分苦心して居た所が其後年經て私が江戶に來て先づ大に驚いたことがある、と申すは只の鑢は鋼鐵を斯うして斯う遣れば私の手にもヲシ〳〵出來るが鋸鑢ばかりは六かしいソコデ江戶に這入たとき今思へば芝の田町、處も覺えて居る、江戶に這入て往來の右側の家で小僧が鋸の鑢の目を叩て居る皮を鑢の下に敷いて鏨で刻んで颯々と出來る樣子だから私は立留て之を見て心の中で扨々大都會なる哉、途方もない事が出來るもの哉、自分等は夢にも思はぬ鋸の鑢を拵へやうと云ふことは全く考へたこともない然るに子供がアノ通り遣て居るとは途方もない工藝の進んだ場所だと思て江戶に這入た其日に感心したことがあると云ふやうな譯けで少年の時から讀書の外は俗な事ばかりして俗な事ばかり考へて居て年を取ても兎角手先きの細工事が面白くて動もすれば鉋だの鑿だの買集めて何か作つて見やう繕ふて見やうと思ふ其物は皆な俗な物ばかり所謂美術と云ふ思想は少しもない、平生萬事至極殺風景で衣服住居などに一切頓着せず如何いふ家に居てもドンナ着物を着ても何とも思はぬ着物の上着か下着かソレモ構はぬ況して流行の縞模樣など考へて見たこともない程の不風流なれども何か私に得意があるかと云へば刀劍の拵へとなれば是れは善く出來たとか小道具の作柄釣合が如何とか云ふ考はある是れは田舍ながら手に少し覺えのある藝から自然に養ふた意匠でせう夫れから私が世間に無頓着と云ふことは少年から持て生れた性質、周圍の事情に一寸とも感じない、藩の小士族などは酒、油醬油などを買ふときは自分自から町に使に行かなければならぬ、所が其頃の士族一般

の風として頬冠をして宵出掛て行く、私は頬冠は大嫌ひだ生れてからしたことはない物を買ふに何だ銭を遣て買ふに少しも構ふことはないと云ふ氣で顔も頭も丸出しで士族だから大小は挟すが徳利を提て夜は扨置き白晝公然町の店に行く、銭は家の銭だ盗んだ銭ぢやないぞと云ふやうな氣位で却て藩中者の頬冠をして見榮をするのを可笑しく思たのは少年の血氣、自分獨り自惚て居たのでせうソレカラ又家に客を招く時に大根や牛蒡を煮て喫せると云ふことに就て必要があるから母の指圖に從て働て居た所で私は客などがウヂャ〳〵酒を呑むのは大嫌ひ、俗な奴等だ呑むなら早く呑で歸て仕舞へば宜いと思ふのに中々歸らぬ家は狹くて居處もない仕方ないから客の呑でる間は私は押入の中に這入て寢て居る、何時でも客をする時には客の來る迄は働く、けれども夕方になると自分も酒が好だから颯々と酒を呑で飯を喰て押入に這入て仕舞ひ客が歸た跡で押入から出て何時も寢る處に寢直すのが常例でした

夫れから私の兄は年を取て居て色々の朋友がある時勢論などをして居たのを聞たこともある、けれども私は夫れに就て喙を容れるやうな地位でない只追使れる許り其時中津の人氣は如何かと云へば學者は擧て水戸の御隱居様即ち烈公の事と越前の春嶽様の話が多い、學者は水戸の老公と云ひ俗では、水戸の御隱居様と云ふ御三家の事だから譜代大名の家來は大變に崇めて假初にも隱居などと呼棄にする者は一人もない水戸の御隱居様水戸の老公と尊稱して天下一の人物のやうに話して居たから私も左様思て居ましたソレカラ江川太郎左衛門も幕府の旗本だから江川様と蔭でも屹と様付にして之も中々評判が高い、或時兄などの話に江川太郎左衛門と云ふ人は近世の英雄で寒中袷

一枚着て居ると云ふやうな話をして居るのを私が側から一寸と聞て何に其位の事は誰でも出來ると云ふやうな氣になつてソレカラ私は誰にも相談せずに毎晩搔卷一枚着て敷蒲團も敷かず疊の上に寢ることを始めた、スルト母は之を見て何の眞似かソンナ事をすると風邪を引くと云て頻りに止めるけれどもトウ〳〵聽かずに一冬通したことがあるが是れも十五六歳の頃、唯人に負けぬ氣で遣たので身體も丈夫であつたと思はれる

又當時世間一般の事であるが學問と云へば漢學ばかり私の兄も勿論漢學一方の人で只他の學者と違ふのは豊後の帆足萬里先生の流を汲んで數學を學んで居ました帆足先生と云へば中々大儒でありながら數學を悅び先生の說に鐵砲と算盤は士流の重んず可きものである其算盤を小役人に任せ鐵砲を足輕に任せて置くと云ふのは大間違ひと云ふ其說が中津に流行して士族中の有志者は數學に心を寄せる人が多い兄も矢張り先輩に傚ふて算盤の高尚な所まで進んだ樣子です此邊は世間の儒者と少し違ふやうだが其他は所謂孝悌忠信で純粹の漢學者に相違ない或時兄が私に問を掛けて「お前は是れから先き何になる積りか」と云ふから私が答へて「左樣さ先づ日本一の大金持になつて思ふさま金を使ふて見やうと思ひます」と云ふと兄が苦い顏して叱つたから私が反問して「兄さんは如何なさる」と尋ねると眞面目に死に至るまで孝悌忠信」と唯一言で私は「ヘーイ」と云た切り其まゝになつた事があるが先づ兄はソンナ人物で又妙な處もある或時私に向て「乃公は總領で家督をして居るが如何かして六かしい家の養子になつて見たい何とも云はれない頑固なゴク喧しい養父母に事へて見たい決して風波を起させない」と云ふのは畢竟養父母と養子との間柄の惡いのは

養子の方の不行屆だと說を極めてたのでせう、所が私は正反對で「養子は忌な事だ大嫌ひだ親でもない人を誰が親にして事へる者があるか」と云ふやうな調子で折々は互に說が違て居ました是れは私の十六七の頃と思ひます

母も亦隨分妙な事を悅んで世間並には少し變はつて居たやうです一體下等社會の者に附合ふことが數寄で出入りの百姓町人は無論穢多でも乞食でも颯々と近づけて輕蔑もしなければ忌がりもせず言葉など至極丁寧でした又宗敎に就て近處の老婦人達のやうに普通の信心はないやうに見える例へば家は眞宗でありながら說法も聞かず「私は寺に參詣して阿彌陀樣を拜むこと許りは可笑しくてキマリが惡くて出來ぬ」と常に私共に云ひながら每月米を袋に入れて寺に持て行て墓參りは缺かしたことはない(其袋は今でも大事に保存してある)阿彌陀樣は拜まぬが坊主には懇意が多い旦那寺の和尚は勿論又私が漢學塾に修業して其塾中に諸國諸宗の書生坊主が居て每度私處に遊びに來れば母は悅んで之を取持て馳走でもすると云ふやうな風でコンナ所を見れば唯佛法が嫌ひでもないやうです兎に角に慈善心はあつたに違ひない玆に誠に穢い奇談があるから話しませう中津に一人の女乞食があつて馬鹿のやうな狂者のやうな至極の難澁者で自分の名か、人の付けたのか、チヱ〳〵と云て每日市中を貰て廻はる所が此奴が穢いとも臭いとも云ひやうのない女で着物はボロ〳〵髮はボウ〳〵其髮に虱がウヤ〳〵して居るのが見える母が每度の事で天氣の好い日などには「おチヱ此方に這入て來い」と云て表の庭に呼込んで土間の草の上に坐らせて自分は襷掛けに身構へをして乞食の虱狩を始めて私は加勢に呼出される、拾ふやうに取れる虱を取ては庭石の上に置きマサ

カ爪で潰すとは出來ぬから私を側に置いて此石の上のを石で潰せと申して私は小さい手ごろな石を以て構へて居る、母が一疋取て臺石の上に置くと私はコツリと打潰すと云ふ役目で五十も百も先づ其時に取れる丈け取て仕舞ひソレカラ母も私も着物を拂ふて糠で手を洗ふて乞食には虱を取らせて呉れた褒美に飯を遣ると云ふ極りで是れは母の樂みでしたらうが私は穢なくて穢なくて堪らぬ今思出しても胸が惡いやうです

又私の十二三歳の頃と思ふ兄が何か反古を揃へて居る處を私がドタバタ踏んで通つた所が兄が大喝一聲コリヤ待てと酷く叱り付けて「お前は眼が見えぬか之を見なさい何と書いてある奥平大膳大夫と御名があるではないか」と大造な權幕だから「アヽ左樣で御在ましたか私は知らなんだ」と云ふと「知らんと云ても眼があれば見える筈ぢや御名を足で踏むとは如何云ふ心得である臣子の道は」と何か六かしい事を並べて嚴しく叱るから謝らずには居られぬ「私が誠に惡う御在ましたから堪忍して下さい」と御辭儀をして謝つたけれども心の中では謝りも何もせぬ「何の事だらう殿樣の頭でも踏みはしなからう名の書いてある紙を踏んだからつて構ふとはなさゝうなものだ」と甚だ不平でソレカラ子供心に獨り思案して兄さんの云ふやうに殿樣の名の書いてある反古を踏んで惡いと云へば神樣の名のある神札を踏んだら如何だらうと思て人の見ぬ處で御札を踏んで見た所が何ともない「ウム何ともないコリヤ面白い今度は之を洗手場に持て行て遣らう」と一歩を進めて便所に試みて其時は如何かあらうかと少し怖かつたが後で何ともない「ソリヤ見たことか兄さんが餘計なあんな事を云はんでも宜いのぢや」と獨り發明したやうなものだが是れ許りは母にも云はれず姉

にも云はれず云へば屹と叱られるから一人で窃と默つて居ました
ソレカラ一つも二つも年を取れば自から度胸も好くなつたと見えて年寄などの話にする神罰冥罰なんと云ふことは大嘘だと獨り自から信じ切て今度は一つ稲荷様を見て遣らうと云ふ野心を起して私の養子になつて居た叔父様の家の稲荷の社の中には何が這入て居るか知らぬと明けて見たら石が這入て居るから其石を打擲つて仕舞て代りの石を拾ふて入れて置き又隣家の下村と云ふ屋敷の稲荷様を明けて見れば神體は何か木の札で之を取て棄てゝ仕舞ひ平氣な顔して居ると間もなく初午になつて幟を立てたり太鼓を叩いたり御神酒を上げてワイ／＼して居るから私は可笑しい「馬鹿め乃公の入れて置いた石に御神酒を上げて拜んでるとは面白い」と獨り嬉しがつて居たと云ふやうな譯けで幼少の時から神様が怖いだの佛様が有難いだの云ふこ

とは一寸ともない卜筮呪詛一切不信仰で狐狸が付くと云ふやうなことは初めから馬鹿にして少しも信じない子供ながらも精神は誠にカラリとしたものでした或時に大阪から妙な女が來たことがある其女と云ふのは私共が大阪に居る時に邸に出入をする上荷頭の傳法寺屋松右衛門と云ふものゝ娘で年の頃三十位でもあつたかと思ふ其女が中津に來てお稲荷様を使ふことを知て居ると吹聴する其次第は誰にでも御幣を持たして置て何か祈ると其人に稲荷様が憑據くとか何とか云て頻りに私の家に來て法螺を吹て居る夫れから其時に私は十五六の時だと思ふ「ソリャ面白い遣て貰はう乃公が其御幣を持たう持て居る御幣が動き出すと云ふのは面白いサア持たして呉れろ」と云ふと其女がつく／＼と私を見て居て「坊さんはイケマヘン」と云ふから私は承知しない「今誰にでもと云たぢやないかサア遣て見せろ」と酷く其女

を弱らして面白がつた事がある
ソレカラ私が幼少の時から中津に居て始終不平で堪らぬと云ふのは無理でない一體中津の藩風と云ふものは士族の間に門閥制度がチャンと定まつて居て其門閥の堅い事は啻に藩の公用に就てのみならず今日私の交際上子供の交際に至るまで貴賤上下の區別を成して上士族の子弟が私の家のやうな下士族の者に向ては丸で言葉が違ふ私などが上士族に對してアナタが如何なすつて斯うなすつてと云へば先方では貴樣が爾う爲やつて斯う爲やれと云ふやうな風で萬事其通りで何でもない只子供の戯れの遊びにも門閥が付て廻るから如何しても不平がなくては居られない其癖今の貴樣とか何とか云ふ上士族の子弟と學校に行て讀書會讀と云ふやうな事になれば何時でも此方が勝つ學問ばかりでない腕力でも負けはしない夫れが其交際朋友互に交つて遊ぶ子供遊の間にもちやんと門閥と云ふものを持て横風至極だから子供心に腹が立て堪らぬ况して大人同士藩の御用を勤めて居る人々に貴賤の區別は中々喧ましいことで私が覺えて居るが或時私の兄が家老の處に手紙を遣て少し學者風で其表書に何々樣下執事と書いて遣たら大に叱られ下執事とは何の事だ御取次衆と認めて來いと云て手紙を突返して來た私は之を見ても側から獨り立腹して泣たことがある馬鹿々々しい、こんな處に誰が居るものか如何したつて是れはモウ出るより外に仕樣がないと始終心の中に思て居ましたソレカラ私も次第に成長して少年ながらも少しは世の中の事が分るやうになる中に私の從兄弟などにも隨分一人や二人は學者がある能く書を讀む男がある固より下士族の仲間だから兄なぞと話のときには藩風が善くないとか何とかいろ〳〵不平を洩らして居るのを聞いて私

は始終それを止めて居ました「よしなさい馬鹿々々しい此中津に居る限りはそんな愚論をしても役に立つものでない不平があれば出て仕舞が宜い、出なければ不平を云はぬが宜」と毎度止て居たことがあるが是れはマア私の生付きの性質とでも云ふやうなものでせう或時私が何か漢書を讀む中に喜怒色に顯さずと云ふ一句を讀で其時にハット思ふて大に自分で安心決定したことがある是れはドウモ金言だと思ひ始終忘れぬやうにして獨り此教を守りソコデ誰が何と云て賞めて呉れても唯表面に程よく受けて心の中には決して喜ばぬ又何と輕蔑されても決して怒らない、どんな事があつても怒つた事はない況や朋輩同士で喧嘩をしたと云ふことは只の一度もない、ツイゾ人と摑合つたの打つたの、打たれたのと云ふことは一寸ともない、是れは少年の時ばかりでない少年の時分から老年の今日に至るまで私の手は怒に乘じて人の身體に觸れたことはない、所が先年二十何年前、塾の書生に何とも仕方のない放蕩者があつて私が多年衣食を授けて世話をして遣るにも拘はらず再三再四の不埒、或るとき其ものが何處に何をしたか夜中酒に醉て生意氣な風をして歸て來たゆゑ「貴様は今夜寢ることはならぬ起きてチャント正座して居ろ」と申渡して置て少して行て見ればグウ〳〵鼾をして居る、此不埒者めと云て其肩の處をつらまへて引起して目の醒めてるのを尚ほグン〳〵ゆたぶつて遣たことがある其時跡で獨り考へて「コリヤ惡い事をした乃公は生涯、人に向て此方から腕力を仕掛けたやうなことはなかつたに今夜は氣に濟まぬ事をした」と思て何だか坊主が戒律でも破たやうな心地がして今に忘れることが出來ません、其癖私は少年の時から能く饒舌り、人並よりか口數の多い程に饒舌つて爾うして何でも爲ることは甲斐々々しく遣て決し

て人に負けないけれども書生流儀の議論と云ふことをしない假令ひ議論すればと云てもほんとうに顔を赧めて如何あつても勝たなければならぬと云ふ議論をしたことはない、何か議論を始めてひどく相手の者が躍起となつて來れば此方はスラリと流して仕舞ふ「彼の馬鹿が何を馬鹿を云て居るのだ」と斯う思て頓と深く立入ると云ふことは決して遣らなかつたソレでモウ自分の一身は何處に行て如何な辛苦も厭はぬ唯この中津に居ないで如何かして出て行きたいものだと獨り夫ればかり祈つて居た處がとうと長崎に行くことが出來ました

長崎遊學

それから長崎に出掛けた頃は安政元年二月即ち私の年二十一歳（正味十九歳三箇月）の時である其時分には中津の藩地に横文字を讀む者がないのみならず横文字を見たものもなかつた都會の地には洋學と云ふものは百年も前からありながら中津は田舍の事であるから原書は扨置き横文字を見たことがなかつた所が其頃は丁度ペルリの來た時で亞米利加の軍艦が江戸に來たと云ふことは田舍でも皆知て同時に砲術と云ふことが大變喧しくなつて來てソコデ砲術を學ぶものは皆和蘭流に就て學ぶので、其時私の兄が申すに「和蘭の砲術を取調べるには如何しても原書を讀まなければならぬ」と云ふから私には分らぬ「原書とは何の事です」と兄に質問すると兄の答に「原書と云ふは和蘭出版の横文字の書だ今、日本に飜譯書と云ふものがあつて西洋の事を書いてあるけれども眞實に事を調べるには其大本の蘭文の書を讀まなければならぬ、夫れに就ては貴様は其原書を讀む氣はないか」と云ふ所が私は素と漢書を學んで居るとき同年輩の朋友の中では何時も出來が

好くて讀書講義に苦勞がなかつたから自分にも自然頼にする氣があつたと思はれる「人の讀むものなら横文字でも何でも讀みませう」とソコデ兄弟の相談は出來て其時丁度兄が長崎に行く序に任せ兄の供をして參りました長崎に落付き、始めて横文字のabcと云ふものを習ふたが今では日本國中到る處に德利の貼紙を見ても横文字は幾許もある、目に慣れて珍しくもないが始めての時は中々六かしい廿六文字を習ふて覺えて仕舞ふまでには三日も掛りました、けれども段々讀む中には又左程でもなく次第々々に易くなつて來たが其蘭學修業の事は扨置き抑も私の長崎に往たのは唯田舍の中津の窮屈なのが忌で〳〵堪らぬから文學でも武藝でも何でも外に出ることが出來さへすれば有難いと云ふので出掛けたことだから故郷を去るに少しも未練はない、如斯處に誰が居るものか一度出たらば鐵砲玉で再び歸て來はしな

いぞ今日こそ宜い心地だと獨り心で喜び後向て唾して颯々と足早にかけ出したのは今でも覺えて居る夫れから長崎に行てさうして桶屋町の光永寺と云ふお寺を便つたと云ふのは其時に私の藩の家老の倅で奧平壹岐と云ふ人は其お寺と親類で其處に寓居して居るのを幸ひに其人を便つてマアお寺の居候になつて居る其中に小出町に山本物次郎と云ふ長崎兩組の地役人で砲術家があつて其處に奧平が砲術を學んで居る其緣を以て奧平の世話で山本の家に食客に入込みました抑も是れが私の將來活動の始まり有らん限りの仕事を働き何でもしない事はない其先生が眼が惡くて書を讀むことが出來ないから私が色々な時勢論など漢文で書いてある諸大家の書を讀んで先生に聞かせる又其家に十八九の倅が在て獨息子、餘りエライ少年でない、けれども本は讀まなければならぬと云ふのでソコで其倅に漢書を敎へて遣ら

なければならぬ是れが仕事の一つ、それから家は貧乏だけれども活計は大きい、借金もある様子で其借金の云延し、新に借用の申込みに行き又金談の手紙の代筆もする、其處の家に下婢が一人に下男が一人ある動もすると其男が病氣とか何とか云ふ時には男の代をして水も汲む朝夕の掃除は勿論先生が湯に這入る時は脊中を流したり湯を取たりして遣らなければならぬ又其内儀さんが猫が大好き狆が大好き生物が好きで猫も狆も犬も居る其生物一切の世話をしなければならぬ、上中下一切の仕事私一人で引受けて遣て居たから酷く調法な男だ何とも云はれない調法な血氣の少年であり乍ら其少年の行狀が甚だ宜しい、甚だ宜しくて甲斐々々しく働くと云ふのでソコデ以て段々其山本の家の氣に入て仕舞には先生が養子にならないかと云ふ私は前にも云ふ通り中津の士族で遂ぞ自分は知りはせぬが少さい時から叔父の家の養子になつて居るから其事を云ふと先生が夫れなら尚更ら乃公の家の養子になれ如何でも乃公が世話をして遣るからと度々云はれた事がある

其時の一體の砲術家の有様を申せば寫本の藏書が秘傳で其本を貸すには相當の謝物を取て貸す、寫したいと云へば寫す爲めの謝料を取ると云ふのが先づ山本の家の臨時收入で其一切の砲術書を貸すにも寫すにも先生は眼が悪いから皆私の手を經る、それで私は砲術家の一切の元締になつて何もかも私が一切取扱て居る其時分の諸藩の西洋家、例へば宇和島藩、五島藩、佐賀藩、水戸藩などの人々が來て或は出島の和蘭屋敷に行て見たいとか或は大砲を鑄るから圖を見せて呉れとか、そんな世話をするのが山本家の仕事で其實は皆私が遣る、私は本來素人で鐵砲を打つのを見た事もないが圖を引くのは譯けはない颯々と圖

を引いたり說明を書いたり諸藩の人が來れば何に付けても獨り罷り出て丸で十年も砲術を學んで立派に砲術家と見られる位に挨拶をしたり世話をしたりすると云ふ調子である處で私を山本の居候に世話をして入れて吳れた人卽ち奧平壹岐だ、壹岐と私とは主客處を易へて私が主人見たやうになつたから可笑しい、壹岐は元來漢學者の才子で局量が狹い小藩でも大家の子だから如何も我儘だ、もう一つは私の目的は原書を讀むに在て蘭學醫の家に通ふたり和蘭通詞の家に行つたりして一意專心原書を學ぶ原書と云ふものは始めて見たのであるが五十日百日とおひ／＼日を經るに從て次第に意味が分るやうになる、所が奧平壹岐はお坊さん、貴公子だから緻密な原書などの讀める譯けはない其中に此方は餘程エラクなつたのが主公と不和の始まり、全體奧平と云ふ人は決して深い巧みのある惡人ではない唯大家の我儘なお坊さんで智惠がない度量がない、其時に旨く私を籠絡して生捕つて仕舞へば譜代の家來同樣に使へるのに却てヤッカミ出したとは馬鹿らしい、歲は私より十ばかり上だが何分氣分が子供らしくてソコデ私を中津に還へすやうな計略を運らしたのが私の身には一大災難

ソリャ斯う云ふ次第になつて來た其奧平壹岐と云ふ人に與兵衞と云ふ實父の隱居があつて私共は之を御隱居樣と崇めて居た、ソコデ私の父は二十年前に死んで居るのですけれども私の兄が成長の後に父のするやうな事をして又大阪に行て勤番をして居て中津には母一人で何もない姉は皆嫁いて居て身寄りの若い者の中には私の從兄の藤本元岱と云ふ醫者が唯一人能く事が分り書も能く讀める學者であるが、そこで中津に在る彼の御隱居樣が無法な事をしたと云ふは何れ長崎の悴壹岐の方から打合のあつたものと見えて其隱居が從兄の藤本を

呼に來て隱居の申すに諭吉を呼還せアレが居ては倅壹岐の妨げになるから早々呼還せ但しソレに就ては母が病氣だと申遣はせと云ふ御直の嚴命が下つたから固より否むとは出來ず畏りましたと答へて母にも其よしを話してソレカラ從兄が私に手紙を寄送して母の病氣に付き早々歸省致せと云ふ表向の手紙と又別紙に實は隱居から斯う〳〵云ふ次第餘儀なく手紙を出したが決して母の身を案じるなと詳に事實を書いて吳れたから私は之を見て實に腹が立つた何だ鄙劣千萬な計略を運らして母の病氣とまで僞を云はせる、ソンナ奴があるものかモウ燒けだ大議論をして遣らうかと思たがイヤ〳〵左樣でない今アノ家老と喧嘩をした所が負けるに極つて居る戰はずして勝負は見えてる一切喧嘩はしないアンナ奴と喧嘩をするよりも自分の身の始末が大事だと思直して夫れからシラバクレて膽を潰した風をして奥平の處に行て扨中津から箇樣申して參りました母が俄に病氣になりました平生至極丈夫な方でしたが實に分らぬものです今頃は如何云ふ容體でせうか遠國に居て氣になりますなんて心配さうな顏してグチャ〳〵述立てると奥平も大に驚いた顏色を作り左樣かソリャ氣の毒な事ぢや嘸心配であらう兎に角に早く歸國するが宜からう併し母の病氣全快の上は又再遊の出來るやうにして遣るからと慰さめるやうに云ふのは狂言が旨く行はれたと心中得意になつて居るに違ひないソレカラ又私は言葉を續けて唯今御指圖の通り早々歸國しますが御隱居樣に御傳言は御在ませんか何れ歸れば御目に掛ります又何か御品があれば何でも持て歸りますと云て一ト先づ別れて翌朝又行て見ると主公が家に遣る手紙を出して之を屋敷に屆けて吳れ親仁に斯う〳〵傳言をして吳れと云ひ又別に私の母の從弟の大橋六助と

云ふ男に遣る手紙を渡して、これを六助の處に持て行け爾うすると貴様の再遊に都合が宜からうと云て故意と其手紙に封をせずに明けて見よがしにしてあるから何もかも委細承知して丁寧に告別して宿に歸て封なしの手紙を開て見れば「諭吉は母の病氣に付き是非歸國と云ふから其意に任せて還すが修業勉強中の事ゆゑ再遊の出來るやう其方にて取計らへ」と云ふ文句、私は之を見てます／＼癪に障る「此猿松め馬鹿野郎め」と獨り心の中で罵りソレカラ山本の家にも事實は云はれぬ、若し是れが顯はれて奥平の不面目にもなれば禍は却て私の身に降て來て如何な目に逢ふか知れないソレガ怖いから唯母の病氣とばかり云て暇乞をしました

丁度そのとき中津から鐵屋惣兵衛と云ふ商人が長崎に來て居て幸ひ其男が中津に歸ると云ふから兎も角も之と同伴と約束をして置てソコデ私の胸算は固より中津に歸る氣はない何でも人間の行く可き處は江戸に限る是れから眞直に江戸に行きませうと決心はしたが此事に就ては誰かに話して相談をせねばならぬ所が江戸から來た岡部同直と云ふ蘭學書生がある是れは醫者の子で至極面白い慥かな人物と見込んだから此男に委細の内情を打明けて「斯う／＼云ふ次第で僕は長崎に居られぬ餘り癪に障るから此まゝ江戸に飛出す積りだが實は江戸に知る人はなし、方角が分らぬ、君の家は江戸ではないか大人は開業醫と聞いたが君の家に食客に置て呉れる事は出來まいか僕は醫者でないが丸藥を丸める位の事は屹と出來るから何卒世話をして貰ひたい」と云ふと岡部も私の身の有樣を氣の毒に思ふたか、私と一緒になつて腹を立てゝ容易く私の云ふ事を請合ひ「ソレは出來やう何でも江戸に行け、僕の親仁は日本橋檜物町に開業して居るから手紙を書いて

遣らう」と云て親仁名當の一封を呉れたから私は喜んで之を請取り「ソコデ今此事が知れると大變だ中津に歸らなければならぬやうになるから是ればかりは奥平にも山本にも一切誰にも云はずに君一人で呑込んで居て外に洩らさぬやうにして僕は是れから下ノ關に出て船に乘て先づ大阪に行く凡そ十日か十五日も掛れば着くだらう其時を見計らふて中村(諭吉當時は中村の姓を冐す)は初めから中津に歸る氣はなかつた江戸に行くと云て長崎を出たと奥平にも話して呉れ是れも聊か面當だ」と互に笑て朋友と内々の打合せは出來た

それから奥平の傳言や何かをすつかり手紙に認めて仕舞ひ是れは例の御隱居樣に遣らなければならぬ「私は長崎を出立して中津に歸る所存で諫早まで參りました處が其途中で不圖江戸に行きたくなりましたから是れから江戸に參ります就ては壹岐樣から斯樣々々の御傳言でお手紙は是れですからお屆け申す」と丁寧に認めて遣つてソレカラ封をせずに渡した即ち大橋六助に宛た手紙を本人に屆ける爲めに私が手紙を書添へて「此通りに封をせぬのは可笑しい、こんな馬鹿な事はないが此儘御屆け申します原はと云へば自分の方で呼還すやうに企てゝ置きながら表べに人を欺くと云ふのは卑劣至極な奴だ私はもう中津に歸らずに江戸に行くから此手紙を御覽下さい」と云ふやうな鹽梅に認めて萬事の用意は出來て鐵屋惣兵衞と一處に長崎を出立して諫早まで――此間は七里ある――來た丁度夕方着たが何でも三月の中旬月の明るい晩であつた「扨鐵屋乃公は長崎を出る時は中津に歸る所存であつたが是れから中津に歸るは忌になつた貴樣の荷物と一處に乃公の此葛籠も序に持て歸て呉れ乃公はもう着換が一二枚あれば澤山だ是れから下ノ關に出て大阪へ行て夫れから江戸に行くのだ」と云

ふと惣兵衞殿は呆れて仕舞ひ「それは途方もない、お前さんのやうな年の若い旅慣れぬお坊さんが一人で行くと云ふのは」「馬鹿云ふな口があれば京に上る長崎から江戸に一人行くのに何のことがあるか」「けれども私は中津に歸てお母さんにいひ様がない」「なあに構ふものか乃公は死も何もせぬから内のおッ母さんに宜しく云て呉れ唯江戸に參りましたと云へば夫れで分る」鐵屋も何とも云ふとが出來ぬ「時に鐵屋乃公は是れから下ノ關に行かうと思ふが實は下ノ關を知らぬ貴様は諸方を歩くが下ノ關に知てる船宿はないか」「私の懇意な内で船場屋壽久右衞門と云ふ船宿があります其處へお入來なされば宜しい」と云ふ抑も此事を態々鐵屋に聞かねばならぬと云ふのは實は其時私の懷中に金がない内から呉れた金が一歩もあつたか其外に和蘭の字引の譯鍵と云ふ本を賣て掻集めた所で二歩二朱か三朱しかない、それで大阪まで行くには如何しても船賃が足らぬと云ふ見込だからそこで一寸と船宿の名を聞て置て夫れから鐵屋に別れて諫早から丸木船と云ふ船が天草の海を渡る五百八十文出して其船に乘れば明日の朝佐賀まで着くと云ふので其船に乘た所が浪風なく朝佐賀に着て佐賀から歩いたが案内もなければ何もなく眞實一身で道筋の村の名も知らず宿々の順も知らずに唯東の方に向て小倉には如何行くかと道を聞て筑前を通り抜けて多分太宰府の近所を通つたらうと思ひますが小倉には三日めに着た其間の道中と云ふものは隨分困りました一人旅殊に何處の者とも知れぬ貧乏さうな若侍若し行倒になるか暴れでもすれば宿屋が迷惑するから容易に泊めない、もう宿の善惡は擇ぶに暇なく只泊めて呉れさへすれば宜しいと云ふので無暗に歩行いて何か斯か二晩泊つて三日目に小倉に着きました其道中で私は手紙を書いて卽ち

鐵屋惣兵衛の贋手紙を拵へて「此御方は中津の御家中中村何樣の若旦那で自分は始終そのお屋敷に出入して決して間違なき御方だから厚く頼む」と鹿爪らしき手紙の文句で下ノ關船場屋壽久右衛門へ宛て鐵屋惣兵衛の名前を書いてちやんと封をして明日下ノ關に渡て此手紙を用に立てんと思ひ小倉までたどり付て泊つた時はをかしかつた、彼方此方マゴ〳〵して小倉中宿を捜したが何處でも泊めない、ヤット一軒泊めて呉れた處が薄汚ない宿屋で相宿の同間に人が寢て居る、スルト夜半に枕邊で小便する音がする何だと思ふと中風病の老爺がしびんに遣てる實は客ではない其家の病人でせう其病人と並べて寢かされたので汚くて堪らなかつたのは能く覺えて居ます
それから下ノ關の渡場を渡て船場屋を捜し出して兼て用意の贋手紙を持て行た所が成程鐵屋とは懇意な家と見える手紙を一見して早速泊めて呉れて萬事能く世話をして呉れて大阪まで船賃が一分二朱賄の代は一日若干ソコデ船賃を拂ふた外に二百文か三百文しか殘らぬ併し大阪に行けば中津の倉屋敷で賄の代を拂ふ事にして是れも船宿で心能く承知して呉れる惡い事だが全く贋手紙の功德でせう
小倉から下ノ關に船で來る時は怖い事がありました途中に出た所が少し荒く風が吹て浪が立て來た、スルト其纜を引張て呉れ其方の處を如何して呉れと船頭が何か騷ぎ立て乘組の私に頼むから、ヨシ來たと云ふので纜を引張たり柱を起したり面白半分に樣々加勢をして先づ滯りなく下ノ關の宿に着て「今日の船は如何したのか斯う〳〵云ふ浪風で斯う云ふ目に遇た潮を冠つて着物が濡れた」と云ふと宿の內儀さんが「それはお危ない事ぢや彼れが船頭なら宜いが實は百姓です此節暇なものですから內職にそんな事をします百姓が農業の間に慣れぬ

事をするから少し浪風があると毎度大きな間違ひを仕出來します」と云ふのを聞て實に怖かつた成程奴等が一生懸命になつて私に加勢を頼んだのも道理だと思ひました

夫れから船場屋壽久右衛門の處から乘た船には三月の事で皆上方見物、夫れは〳〵種々な奴が乘て居る間拔けな若旦那も乘て居れば頭の禿た老爺も乘て居る上方邊の茶屋女も居れば下ノ關の安女郎も居る坊主も百姓も有らん限りの動物が揃ふて其奴等が狹い船の中で酒を飮み博奕をする下らぬ事に大きな聲をして聞かれぬ話をして面白さうにしてる中に私一人は眞實無言丸で取付端がない、船は安藝の宮島へ着た私は宮島に用はない唯來たから唯島を見に上る、外の連中はお互に朋友だから宜いだらう皆酒を飮む私も飮みたくて堪らぬけれども金がないから只宮島を見たばかりで船に歸て來てむしや〳〵船の飯を喰てるから船頭もこんな客は忌やだらう妙な顏をして私を睨んで居たのは今でも覺えて居る其前に岩國の錦帶橋も餘儀なく見物して夫れから宮島を出て讃岐の金比羅樣だ多度津に船が着て金比羅まで三里と云ふ行きたくないことはないが金がないから行かれない外の奴は皆船から出て行て私一人で船の番をして居る、爾うすると一晩泊てどいつもこいつもグデン〳〵に醉て陽氣になつて歸て來る癪に障るけれども何としても仕樣がない、爾う云ふ不愉快な船中で如何やら斯うやら十五日目に播州明石に着た朝五ッ時今の八時頃、明旦順風になれば船が出ると云ふ、けれどもコンナ連中のお供をしては際限がない是れから大阪までは何里と聞けば十五里と云ふ「ヨシ、それぢや乃公は是れから大阪まで歩いて行く就ては是迄の勘定は大阪に着たら中津の倉屋敷まで取りに來い此荷物だけは預けて行くから」と云ふと船頭

が中々聞かない「爾う旨くは行かぬ一切勘定を拂て行け」と云ふ、云はれても拂ふ金は懷中にない其時に私は更紗の着物と絹紬の着物と二枚あつて、それを風呂敷に包んで持て居るから「茲に着物が二枚ある、是れで賄の代位はあるだらう外に書籍もあるが是れは何にもならぬ此着物を賣れば其位の金にはなるではないか大小を預ければ宜いが是れは挾して行かねばならぬ何時でも宜しい船が大阪に着次第に中津屋敷で拂て遣るから取りに來い」と云ふも船頭は頑張て承知しない「中津屋敷は知てるがお前さんは知らぬ人ぢや何でも船に乘て行きなさい賄の代金は大阪で請取ると云ふ約束がしてあるからそれは宜しい何日掛ても構はぬ途中から上ることは出來ぬ」と云ふ此方は只管頼むと小さくなつて譯けを云へば船頭は何でも聞かぬと剛情を張て段々聲が大きくなる喧嘩にもならず實に當惑して居た處に同船中下ノ關の

商人風の男が出て來て乃公が請合ふと先づ發言して船頭に向ひ「コレお前も爾う、いんごふな事を云ふものぢやない賄代の抵當に着物があるぢやないか、此お方はお侍ぢや貴樣達を騙す所存ではないやうに見受ける若し騙したら乃公が拂ふサアお上りなさいと云て船頭も是れに安心して無理も云はずソレカラ私は其下ノ關の男に厚く禮を述て船を飛出し地獄に佛と心の中に此男を拜みました

そこで明石から大阪まで十五里の間と云ふものは私は泊ることが出來ぬ財布の中はモウ六七十文、百に足らぬ錢で迚も一晩泊ることは出來ぬから何でも歩かなければならぬ途中何と云ふ處か知らぬが左側の茶店で一合十四文の酒を二合飲んで大きな筍の煮たのを一皿と飯を四五杯喰て夫れからグン〳〵歩いて今の神戸邊は先だか後だかどう通たか少しも分らぬ爾うして大阪近くなると今の鐵道の道らしい

川を幾川も渡て、有難い事にお侍だから船賃は只で宜かつたが日は暮れて暗夜で眞暗、人に逢はなければ道を聞くことが出來ず夜中淋しい處で變な奴に逢へば却て氣味が惡い其時私の挾してる大小は脇差は祐定の丈夫な身であつたが刀は太刀作りの細身でどうも役に立ちさうでなくて心細かつた實を云へば大阪近在に人殺しの無暗に出る譯けもないソンナに怖がる事はない筈だが獨旅の夜道、眞暗ではあるし臆病神が付いてるからツヒ腰の物を便りにするやうな氣になる後で考へれば却て危ない事だと思ふソレカラ始終道を聞くには幼少の時から中津の倉屋敷は大阪堂島玉江橋と云ふことを知てるから唯大阪の玉江橋へはどう行くかとばかり尋ねてヤツト夜十時過ぎでもあらう中津屋敷に着て兄に逢たが大變に足が痛かつた

大阪に着て久振で兄に逢ふのみならず屋敷の内外に幼ない時から私を知てる者が澤山ある私は三歳の時に國に歸て二十二歳に再び行たのですから私の生れた時に知てる者は澤山、私の面が何處か幼顔に肖て居ると云ふ其中には私に乳を呑まして吳れた仲仕の内儀さんもあれば又今度兄の供をして中津から來て居る武八と云ふ極質朴な田舍男は先年も大阪の私の家に奉公して私のお守をした者で私が大阪に着た翌日此男を連れて堂島三丁目か四丁目の處を通ると男の云ふにお前の生れる時に我身夜中に此横町の彼の産婆さんの處に迎ひに行たとがある其産婆さんは今も達者にし居るそれからお前が段々大きくなつて此身お前をだいて毎日々々湊の部屋(勸進元)に相撲の稽古を見に行た其産婆さんの家は彼處ぢや湊の稽古場は此處の方ぢやと指をさして見せたときには私も舊を懷ふて胸一杯になつて思はず涙をこぼしました都て如斯な譯けで私はどうも旅とは思はれぬ、眞實故郷に

歸た通りで誠に宜い心地、それから兄が私に如何して貴樣は出し拔けに此處に來たのかといふ、兄の事であるから構はず斯う云ふ次第で參りましたと云たら「乃公が居なければ宜いが道の順序を云て見れば貴樣は長崎から來るのに中津の方が順路だ其中津を橫に見ておッ母さんの處を避て來たではないかそれも乃公が此處に居なければ兎も角乃公が此處で貴樣に面會しながら之を手放して江戶に行けと云へば兄弟共謀だ如何にも濟まぬではないか、おッ母さんは夫程に思はぬだらうが如何しても乃公が濟まぬそれよりか大阪でも先生がありさうなものぢや大阪で蘭學を學ぶが宜いと云ふので兄の處に居て先生を搜したら緖方と云ふ先生のある事を聞出した

鄙事多能は私の獨得、長崎に居る間は山本先生の家に食客生と爲り無暗に勉强して蘭學も漸く方角の分るやうになる其片手に有らん限り先生家の家事を勤めて上中下の仕事なんでも引請けて是れは出來ない其れは忌だと云たことはない丁度上方邊の大地震のとき私は先生家の息子に漢書の素讀をして遣た跡で表の井戶端で水を汲んで大きな荷桶を擔いで一足踏出す其途端にガタ／＼と動搖て足が滑り誠に危ない事がありました

寺の和尙今は旣に物故したさうですが是れは東本願寺の末寺光永寺と申して下寺の三ケ寺も持て居る先づ長崎では名のある大寺、そこの和尙が京に上つて何か立身して歸て來て長崎の奉行所に廻勤に行く其若黨に雇はれてお供をした所が和尙が馬鹿に長い衣か裝束か妙なものを着て居て奉行所の門で駕籠を出ると私が後から其裾を持てシヅ／＼と附いて步いて行く吹出しさうに可笑しい、又其和尙が正月になると大檀那の家に年禮に行く其お供をすれば坊さんが奧で酒でも

飲でる供待の間に供の者にも膳を出して雜煮など喰はせる是れは難有く戴きました

又節分に物貰ひをしたこともある長崎の風に節分の晩に法螺の貝を吹て何か經文のやうな事を怒鳴つて廻はる東京で云へば厄祓ひ其厄祓をして市中の家の門に立てば錢を吳れたり米を吳れたりすることがある所が私の居る山本の隣家に杉山松三郎(杉山德三郎の實兄)と云ふ若い男があつて面白い人物「どうだ今夜行かうぢやないか」と私を誘ふから勿論同意ソレカラ何處かで法螺の貝を借りて來て面を隱して二人で出掛けて杉山が貝を吹くお經の文句は私が少年の時に暗誦して居た蒙求の表題と千字文で請持ち王戎簡要天地玄黃なんぞ出鱈目に怒鳴り立てゝ誠に上首尾、錢だの米だの隨分相應に貰て來て餅を買ひ鴨を買ひ雜煮を拵へてタラフク喰た事がある

私が始めて長崎に來て始めて橫文字を習ふと云ふときに薩州の醫學生に松崎鼎甫と云ふ人がある其時に藩主薩摩守は名高い西洋流の人物で藩中の醫者などに蘭學を引立て松崎も蘭學修業を命ぜられて長崎に出て來て下宿屋に居るから其人に賴んで敎へて貰ふが宜からうと云ふので行た所が松崎がａｂｃを書いて假名を附けて吳れたのには先づ驚いた是れが文字とは合點が行かぬ二十何字を覺えて仕舞ふにも餘程手間が掛たが學べば進むの道理で次第々々に蘭語の綴も分るやうになつて來たソコデ松崎と云ふ先生の人相を見て應對の樣子を察するに決して絕倫の才子でない依て私の心中竊に「是れは高の知れた人物だ今でも漢書を讀で見ろ、自分の方が數等上流の先生だ漢蘭等しく字を讀み義を解することゝすれば左まで此先生を恐るゝことはない如何かしてアベコベに此男に蘭書を敎へて吳れたいものだ」と生

〵々の初學生が無鐵砲な野心を起したのは全く少年の血氣に違ひないツレはそれとして其後私は大阪に行き是れまで長崎で一年も勉強して居たから緒方でも上達が頗る速くて兩三年の間に同窓生八九十人の上に頭角を現はした所が人事の廻り合せは不思議なもので其松崎と云ふ男が九州から出て來て緒方の塾に這入り私は其時ズット上級で下級生の會頭をして居る其會讀に松崎も出席することになつて三四年の間に今昔の師弟アベコベ私の無鐵砲な野心が本當な事になつて固より人には云はれず又云ふ可きことでないから默て居たが其時の愉快は堪らない獨り酒を飲で得意がつて居ました左れば軍人の功名手柄政治家の立身出世金持の財産蓄積なんぞ孰れも熱心で一寸と見ると俗なやうで深く考へると馬鹿なやうに見えるが決して笑ふことはないソンナ事を議論したり理屈を述べたりする學者も矢張り同じことで世間並に俗な馬鹿毛た野心があるから可笑しい

大阪修業

兄の申すことには私も逆らふことが出來ず大阪に足を止めまして緒方先生の塾に入門したのは安政二年卯歳の三月でして其前長崎に居る時には勿論蘭學の稽古をしたので其稽古をした所は楢林と云ふ和蘭通詞の家同じく楢林と云ふ醫者の家、それから石川櫻所と云ふ蘭法醫師、此人は長崎に開業して居て立派な門戸を張て居る大家であるから中々入門することは出來ないソコで其處の玄關に行て調合所の人などに習つて居たので爾う云ふやうに彼方此方にちよい〳〵と敎へて吳れるやうな人があれば其處へ行く何處の何某に便り誰の門人になつてミッチリ蘭書を讀だと云ふことはないのでソコで大阪に來て

緒方に入門したのは是れが本當に蘭學修業の始まり始めて規則正しく書物を敎へて貰ひました、其時にも私は學業の進歩が隨分速くて塾中には大勢書生があるけれども其中ではマア出來の宜い方であつたと思ふソコで安政二年も終り三年の春になると新春早々玆に大なる不仕合な事が起つて來たと申すは大阪の倉屋敷に勤番中の兄が僂麻質斯に罹り病症が甚だ輕くないトウ〱手足も叶はぬと云ふ程になつて追々全快するが如く全快せざるが如くして居る間に右の手は使ふことが出來ずに左の手に筆を持て書くと云ふやうな容體ソレと同時に其歳の二月頃であつたが緒方の塾の同窓私の先輩で豫て世話になつて居た加州の岸直輔と云ふ人が腸窒扶斯に罹つて中々の難症ソコデ私は平生の恩人だからコンナ時に看病しなければならぬ又加州の書生に鈴木儀六と云ふ者があつて是れも岸と同國の縁で私と鈴木と兩人晝夜看病して凡そ三週間も手を盡したけれども如何しても惡症でとう〱助からぬ一體此人は加賀人で宗旨は眞宗だから火葬にして其遺骨を親元に送て遣らうと兩人相談の上遺骸を大阪の千日の火葬場に持て行て燒て骨を本國に送り先づ事は濟んだ所が私が千日から歸つて三四日經つとヒョイと煩ひ付た容體がドゥも只の風邪でない熱があり氣分が甚だ惡いソコデ私の同窓生は皆醫者だから誰かに見て貰た所が是れは腸窒扶斯だ岸の熱病が傳染したのだと云て居る間に其事が先生に聞えて其時私は堂島の倉屋敷の長屋に寢て居た所が先生が見舞に見えまして愈よ腸窒扶斯に違ひない本當に療治しなければ是れは馬鹿にならぬ病氣であると云ふ夫れから私は其時に今にも忘れぬ事のあると云ふのは緒方先生の深切「乃公はお前の病氣を屹と診て遣る、診て遣るけれども乃公が自分で處方することは出來

ない何分にも迷ふて仕舞ふ此の藥彼の藥と迷ふて後になつて爾うでもなかつたと云て又藥の加減をすると云ふやうな譯けで仕舞には何の療治をしたか譯けが分らぬやうになると云ふのは人情の免れぬ事であるから病は診て遣るが執匙は外の醫者に賴む、其つもりにして居れ」と云て先生の朋友梶木町の內藤數馬と云ふ醫者に執匙を託し內藤の家から藥を貰て先生は只每日來て容體を診て病中の攝生法を指圖するだけであつたマア今日の學校とか學塾とか云ふものは人數も多く迚も手に及ばない事で其師弟の間は自から公なものになつて居る、けれども昔の學塾の師弟は正しく親子の通り緒方先生が私の病を見てどうも藥を授るに迷ふと云ふのは自分の家の子供を療治して遣るに迷ふと同じ事で其扱は實子と少しも違はない有樣であつた後世段々に世が開けて進んで來たならばこんな事はなくなつて仕舞ませう

私が緒方の塾に居た時の心持は今の日本國中の塾生に較べて見て大變に違ふ私は眞實緒方の家の者のやうに思ひ又思はずには居られませんソレカラ唯今申す通り實父同樣の緒方先生が立會で內藤數馬先生の執匙で有らん限りの療治をして貰ひましたが私の病氣も中々輕くない煩ひ付て四五日目から人事不省凡そ一週間ばかりは何も知らない程の容體でしたが幸にして全快に及び衰弱はして居ましたれども歲は若し平生身體の强壯な其爲めでせう恢復は中々早いモウ四月になつたら外に出て歩くやうになり其間に兄は僂麻質斯を煩て居り私は熱病の大病後である如何にも始末が付かない

其中に丁度兄の年期と云ふものがあつて二ヶ年居れば國に歸ると云ふ約束で今年の夏が二年目になり私も亦病後大阪に居て書物など讀むことも出來ず兎に角に歸國が宜からうと云ふので兄弟一緒に船に

乘て中津に歸つたのが其歳の五六月頃と思ふ所が私は病後ではあるが日々に恢復して兄の僂麻質斯も全快には及ばないけれども別段に危險な病症でもない夫れでは私は又大阪に參りませうと云て出たのが其歳卽ち安政三年の八月モウ其時は病後とは云はれませぬ中々元氣が能くて大阪に着た其時に私は中津屋敷の空長屋を借用して獨居自炊卽ち土鍋で飯を焚て喰て毎日朝から夕刻まで緒方の塾に通學して居ました

所が又不幸な話で九月の十日頃であつたと思ふ國から手紙が來て九月三日に兄が病死したから卽刻歸て來いと云ふ急報どうも驚いたけれども仕方がない取るものも取り敢へずスグ船に乘て此度は誠に順風で速に中津の港に着て家に歸て見ればモウ葬式は勿論何も斯も片が付て仕舞た後の事でソレカラ私は叔父の處の養子になつて居た、所が自分の本家卽ち里の主人が死亡して娘が一人あれども女の子では家督相續は出來ない是れは弟が相續する、當然の順序だと云ふので親類相談の上私は知らぬ間にチヤント福澤の主人になつて居て、當人の歸國を待て相談なんと云ふことはありはしない貴樣は福澤の主人になつたと知らせて呉れる位の事だ、扨て其跡を襲だ以上は兄でも親だから五十日の忌服を勤めねばならぬ夫れから家督相續と云へば其れ相應の勤がなくてはならぬ藩中小士族相應の勤を命ぜられて居る、けれども私の心と云ふものは天外萬里、何もかも浮足になつて一寸とも落付かぬ何として中津に居やうなど云ふことは思ひも寄らぬ事であるけれども藩の正式に依ればチヤント勤をしなければならぬから其命を拒むとは出來ない唯言行を謹み何と云はれてもハイ〳〵と答へて勤めて居ました自分の内心には如何しても再遊と決して居る

けれども周圍の有様と云ふものは中々寄付かれもしない藩中一般の説は姑く差措き近い親類の者までも西洋は大嫌で何事も話し出すことが出來ないソコデ私に叔父があるから其處に行て何か話をして序ながら夫れとなく再遊の事を少しばかり言掛けて見ると夫れは〳〵恐ろしい劔幕で頭から叱られた「怪からぬ事を申すではないか兄の不幸で貴様が家督相續した上は御奉公大事に勤をする筈のものだソレに和蘭の學問とは何たる心得違ひか呆返つた話だ」とか何とか叱られた其言葉の中に叔父が私を冷かして貴様のやうな奴は負角力の痩錣と云ふものぢやと苦々しく睨み付けたのは身の程知らずと云ふ意味でせう迚も叔父さんに賛成して貰はうと云ふとは出來さうにもしないが私が心に思つて居れば自から口の端にも出る出れば狹い所だから直ぐ分る近處邊りに何處となく評判する、平生私の處に能く來るお婆さんがあつて私の母より少し年長のお婆さんでお八重さんと云ふ人今でも其の人の面を覺えて居るつい向ふのお婆さんで或るとき私方に來て「何か聞けば諭吉さんは又大阪に行くと云ふ話ぢやがマサカお順さん(私の母)そんな事はさせなさらんぢやらう再び出すなんと云ふのはお前さんは氣が違ふて居はせぬか」と云ふやうな世間一般先づソンナ風で其時の私の身の上を申せば寄邊汀の捨小舟、まるで唄の文句のやうだ、ソコデ私は獨り考へた「是れは迚も仕様がない唯賴む所は母一人だ母さへ承知して呉れば誰が何と云ふても怖い者はない」と、ソレカラ私は母にとつくり話した「おッ母さん今私が修業して居るのは斯う云う有様、斯う云ふ鹽梅で長崎から大阪に行て修業して居ります自分で考へるには如何しても修業は出來て何か物になるだらうと思ふ此藩に居た所が何とかしても頭の上る氣遣はない眞に朽果つると云

ふものだどんな事があつても私は中津で朽果てやうとは思ひませんアナタはお淋しいだらうけれども何卒私を手放して下さらぬか私の産れたときにお父ッさんは坊主にすると仰しやつたさうですから私は今から寺の小僧になつたと諦めて下さい」其時私が出れば母と死んだ兄の娘、産れて三つになる女の子と五十有餘の老母と唯の二人で淋しい心細いに違ひないけれどもとつくり話して「どうぞ二人で留主をして下さい私は大阪に行くから」と云たら母も中々思切りの宜い性質で「ウム宜しい」「アナタさへ左様云て下されば誰が何と云ても怖いことはない」「オーさうとも兄が死んだけれども死んだものは仕方がない、お前も亦餘所に出て死ぬかも知れぬが死生の事は一切言ふことなし何處へでも出て行きなさい」ソコデ母子の間と云ふものはちやんと魂膽が出來て仕舞てソレカラ愈よ出やうと云ふことになる、出るには金の始末をしなければならぬ、其金の始末と云ふのは兄の病氣や勤番中の其れ是れの入費凡そ四十兩借金がある此四十兩と云ふものは其時代に私などの家に取ては途方もない大借、これを此儘にして置ては迚も始末が付かぬから何でも片付けなければならぬ如何しやう外に仕方がない何でも賣るのだ一切萬物賣るより外なしと考へて聊か賴みがあると云ふのは私の父は學者であつたから藩中では中々藏書を持て居る凡そ冊數にして千五百冊ばかりもあつて中には隨分世間に類の少ない本もある例へば私の名を諭吉と云ふ其諭の字は天保五年十二月十二日の夜、私が誕生した其日に父が多年所望して居た明律の上諭條例と云ふ全部六七十冊ばかりの唐本を買取て大造喜んで居る處に其夜男子が出生して重ね〳〵の喜びと云ふ所から其上諭の諭の字を取て私の名にしたと母から聞いた事がある位で隨分珍らしい漢書が

あつたけれども母と相談の上藏書を始め一切の物を賣却しやうと云ふことになつて先づ手近な物から賣れるだけ賣らうと云ふので軸物のやうな物から賣り始めて目ぼしい物を申せば頼山陽の半切の掛物を金二分に賣り、大雅堂の柳下人物の掛物を二兩二分、徂徠の書、東涯の書もあつたが誠に値がない見るに足らぬ其他はごた〳〵した雜物ばかり、覺えて居るのは大雅堂と山陽、刀は天正祐定二尺五寸拵付能く出來たもので四兩、ソレカラ藏書だ中津の人で買ふ者はありはせぬ、如何したつて何十兩と云ふ金を出す藩士はありはせぬ所で私の先生白石と云ふ漢學の先生が藩で何か議論をして中津を追出されて豐後の臼杵藩の儒者になつて居たから此先生に便つて行けば賣れるだらうと思て臼杵まで態々出掛けて行て先生に話をした處が先生の世話で殘らずの藏書を代金十五兩で臼杵藩に買て貰ひ先づ一口に大金十五兩が手に入り其他有らん限り皿も茶碗も丼も猪口も一切賣て漸く四十兩の金が揃ひ其金で借金は綺麗に濟だが其藏書中に易經集註十三冊に伊藤東涯先生が自筆で細々と書入をした見事なものがある是れは亡父が存命中大阪で買取て殊の外珍重したものと見え藏書目錄に父の筆を以て此東涯先生書入の易經十三冊は天下稀有の書なり子孫謹で福澤の家に藏む可しと恰も遺言のやうなことが書いてある私も之を見ては何としても賣ることが出來ません是れ丈けはと思ふて殘して置た其十三冊は今でも私の家にあります、夫れと今に殘つて居るのは唐燒の丼が二つある是れは例の雜物賣拂のとき道具屋が直を付けて丼二つ三分と云ふ其三分とは中津の藩札で錢にすれば十八文のことだ餘り馬鹿々々しい十八文ばかり有ても無くても同じことだと思ふて賣らなかつたのが其後四十何年無事で今は筆洗になつて居るの

も可笑しい

夫れは夫れとして私が今度不幸で中津に歸て居る其間に一つ仕事をしました、と云ふのは其時に奥平壹岐と云ふ人が長崎から歸て居たから勿論私は御機嫌伺に出なければならぬ或日奥平の屋敷に推參して久々の面會四方山の話の序に主人公が一冊の原書を出して「此本は乃公が長崎から持て來た和蘭新版の築城書である」と云ふ其書を見た所が勿論私などは大阪に居ても緒方の塾は醫學塾であるから醫書窮理書の外に遂ぞそんな原書を見たことはないから隨分珍書だと先づ私は感心しなければならぬ、と云ふのは其時は丁度ペルリ渡來の當分で日本國中海防軍備の話が中々喧しい其最中に此築城書を見せられたから誠に珍しく感じて其原書が讀で見たくて堪らない、けれども是れは貸せと云た所が貸す氣遣はない夫れからマア色々話をする中に主

人が「此原書は安く買ふた二十三兩で買へたから」なんと云ふたのには實に貧書生の膽を潰すばかり迚も自分に買ふことは出來ず左ればとてゆるりと貸す氣遣はないのだから私は唯原書を眺めて心の底で獨り貧乏を歎息して居る其中にヒヨイと胸に浮んだ一策を遣て見た「成程是れは結構な原書で御在ます迚も之を讀で仕舞ふと云ふことは急な事では出來ません責めては圖と目錄とでも一通り拜見したいものですが四五日拜借は叶ひますまいか」と手輕に觸つて見たらば「よし貸さう」と云て貸して吳れたこそ天與の僥倖ソレカラ私は家に持て歸て卽刻鵞筆と墨と紙を用意して其原書を初から寫掛けた凡そ二百頁餘のものであつたと思ふそれを寫すに就ては誰にも言はれぬのは勿論、寫す處を人に見られては大變だ家の奥の方に引込んで一切客に遇はずに晝夜精切り一杯、根のあらん限り寫した其とき私は藩の御用で城

の門の番をする勤があつて二三日目に一晝夜當番する順になるから其時には晝は寫本を休み夜になれば窃と寫物を持出して朝城門の明くまで寫して一目も眠らないのは毎度のことだが又この通りに勉强しても人間世界は壁に耳あり眼もあり既に人に悟られて今にも原書を返せとか何とか云て來はしないだらうか、いよ〳〵露顯すれば唯原書を返したばかりでは濟まぬ御家老樣の劍幕で中々六かしくなるだらうと思へば其心配は堪らない、生れてから泥坊をしたことはないが泥坊の心配も大抵こんなものであらうと推察しながら、とう〳〵寫し終りて圖が二枚ある其圖も寫して仕舞てサア出來上つた、出來上つたが讀合せに困る是れが出來なくては大變だと云ふと妙な事もあるもので中津に和蘭のスペルリングの讀めるものが只た一人あるそれは藤野啓山と云ふ醫者で此人は甚だ私の處に緣がある、と云ふのは私の

父が大阪に居る時に啓山が醫者の書生で私の家に寄宿して母も常に世話をして遣たと云ふ緣故からして固より信じられる人に違ひないと見拔いて私は藤野の處に行て「大秘密をお前に語るが實は斯う〳〵云ふとで奧平の原書を寫して仕舞た、所が困るのは其讀合せだがお前はどうか原書を見て居て呉れぬか私が寫したのを讀むから、實は晝遣りたいが晝は出來られないヒヨツと分つては大變だから、夜分私が來るから御苦勞だが見て居て呉れよ」と賴んだら藤野が宜しいと快く請合つて呉れてソレカラ私は其處の家に三晩か四晩讀合せに行てソツクリ出來て仕舞たモウ連城の壁を手に握つたやうなもので夫れから原書は大事にしてあるから如何にも氣遣はない、しらばくれて奧平壹岐の家に行て「誠に有難うございますお蔭で始めてこんな兵書を見ました斯う云ふ新舶來の原書が翻譯にでもなりましたら嘸マア海防家

には有益の事でありませう併しこんな結構なものは貧書生の手に得らるゝものでない有難うございました返上致します」と云て綺麗に濟んだのは嬉しかつた此書を寫すに幾日かゝつたか能く覺えないが何んでも二十日以上三十日足らずの間に寫して仕舞ふて原書の主人に毛頭疑ふやうな顏色もなくマンマと其寶物の正味を偸み取て私の物にしたのは惡漢が寶藏に忍び入たやうだ

其時に母が「お前は何をするのかそんなに毎晩夜を更かして碌に寢もしないぢやないか、何の事だ風邪でも引くと宜くない勉強にも程のあつたものだ」と喧しく云ふ「なあにおッ母さん大丈夫だ私は寫本をして居るのです此位の事で私の身體は何ともなるものぢやない御安心下さい決して煩ひはしませぬ」と云ふたことがありましたが、ソレカラ愈よ大阪に出やうとすると玆に可笑しい事がある今度出るには藩に願書を出さなければならぬ可笑しいとも何とも云ひやうがない是れまで私は部屋住だから外に出るからと云て屆も願も要らぬ颯々と出入したが今度は假初にも一家の主人であるから願書を出さなければならぬ夫れから私は兼て母との相談が濟んで居るから叔父にも叔母にも相談は要りはしない出拔けに蘭學の修業に參りたいと願書を出すと懇意な其筋の人が内々知らせて呉れるに「それはイケない蘭學修業と云ふとは御家に先例のない事だ」と云ふ「そんなら如何すれば宜いか」と尋ねれば「左樣さ砲術修業と書いたならば濟むだらう」と云ふ「けれども緒方と云へば大阪の開業醫師だお醫者樣の處に鐵砲を習ひに行くと云ふのは世の中に餘り例のない事のやうに思はれる是れこそ却て不都合な話ではござらぬか」「イヤそれは何としても御例のない事は仕方がない、事實相違しても宜しいから矢張り砲術修業でなければ濟まぬ」

と云ふから「エー宜しい如何でも爲ませう」と云てソレカラ私儀大阪表緒方洪庵の許に砲術修業に罷越したい云々と願書を出して聞濟になつて大阪に出ることになつた大抵當時の世の中の鹽梅式が分るであらう、と云ふのは是れは必ずしも中津一藩に限らず日本國中悉く漢學の世の中で西洋流など云ふことは假初にも通用しない俗に云ふ鼻摑みの世の中に唯ペルリ渡來の一條が人心を動かして砲術だけは西洋流儀にしなければならぬ」と云はゞ一線の血路が開けてソコで砲術修業の願書で穩に事が濟んだのです

願か濟んで愈よ船に乘て出掛けやうとする時に母の病氣誠に困りました、ソレカラ私は一生懸命此の醫者を頼み彼の醫者に相談樣々に介抱した所が蟲だと云ふ、蟲なれば如何なる藥が一番の良劑かと醫者の話を聞くと其時にはまだサントニーネと云ふものはない、セメンシーナが妙藥だと云ふ此藥は至極價の高い藥で田舍の藥店には容易にない中津に只た一軒ある計りだけれども母の病氣に藥の價が高いの安いのと云て居られぬ私は今こそ借金を拂つた後でなけなしの金を何でも二朱か一歩出して其セメンシーナを買て母に服用させて其れが利いたのか何か分らぬ田舍醫者の言ふことも固より信ずるに足らず私は唯運を天に任せて看病大事と晝夜番をして居ましたが幸に難症でもなかつたと見えて日數凡そ二週間ばかりで快くなりましたから愈よ大阪へ出掛けると日を定めて出立のとき別を惜しみ無事を祈つて吳れる者は母と姉とばかり知人朋友見送は扨置き見向く者もなし逃げるやうにして船に乘りましたが兄の死後間もなく家財は殘らず賣拂ふて諸道具もなければ金もなし赤貧洗ふが如くにして他人の來て訪問て吳れる者もなし寂々寥々古寺見たやうな家に老母と小さい

姪とタッタ二人殘して出て行くのですから流石磊落書生も是れには弱りました

船中無事大阪に着たのは宜しいが唯生きて身體が着た計りで扨て修業をすると云ふ手當は何もないハテ如何したものかと思た所が仕方がない何しろ先生の處へ行て此通り言はうと思て夫から大阪着は其歳の十一月頃と思ふ其足で緒方へ行て私は兄の不幸斯う〳〵云ふ次第で又出て參りましたと先づ話をして夫から私は先生だからほんとうの親と同じ事で何も隱すことはない家の借金の始末家財を賣拂ふた事から一切萬事何もかも打明けて彼の原書寫本の一條まで眞實を話して實は斯う云ふ築城書を盜寫して此通り持て參りました」と云た所が先生は笑て「爾うかソレは一寸の間に怪しからぬ惡い事をしたやうな又善い事をしたやうな事ぢや何は扨置き貴樣は大造見違へたやうに丈夫になつた」「左様で御在ます身體は病後ですけれども今歳の春大層御厄介になりました其時の事はモウ覺えませぬ元の通り丈夫になりました」「それは結構だソコデお前は一切聞て見ると如何しても學費のないと云ふことは明白に分つたから私が世話をして遣りたいけれども他の書生に對して何かお前一人に最屓するやうにあつては宜くない待て〳〵其原書は面白い就ては乃公がお前に云付けて此原書を譯させると斯う云ふとに仕やう其つもりで居なさい」と云てソレカラ私は緒方の食客生になつて醫者の家だから食客生と云ふのは調合所の者より外にありはしませぬが私は醫者でなくて只翻譯と云ふ名義で醫家の食客生になつて居るのだから其意味は全く先生と奧方との恩惠好意のみ實際に翻譯はしてもしなくても宜いのであるけれども嘘から出た誠で私は其原書を翻譯して仕舞ひました

私は是れまで緒方の塾に這入らずに屋敷から通つて居たのであるが安政三年の十一月頃から塾に這入て內塾生となり是れが抑も私の書生生活、活動の始まりだ元來緒方の塾と云ふものは眞實日進々步主義の塾で其中に這入て居る書生は皆活潑有爲の人物であるが一方から見れば血氣の壯年亂暴書生ばかりで中々一筋縄でも二筋縄でも始末に行かぬ人物の巣窟、其中に私が飛込で共に活潑に亂暴を働いた、けれども又自から外の者と少々違つて居ると云ふこともお話しなければならぬ先づ第一に私の惡い事を申せば生來酒を嗜むと云ふのが一大缺點、成長した後には自から其惡い事を知ても惡習既に性を成して自から禁ずることの出來なかつたと云ふことも敢て包み隱さず明白に自首します自分の惡い事を公けにするは餘り面白くもないが正味を言はねば事實談にならぬから先づ一ト通り幼少以來の飲酒の歷史を語りませう抑も私の酒癖は年齢の次第に成長するに從て飲覺え、飲慣れたと云ふでなくして生れたまゝ物心の出來た時から自然に數寄でした今に記憶して居る事を申せば幼少の頃月代を剃るとき頭の盆の窪を剃ると痛いから嫌がるスルト剃て呉れる母が「酒を給べさせるから此處を剃らせろ」と云ふ其酒が飲みたさ計りに痛いのを我慢して泣かずに剃らして居た事は幽に覺えて居ます天性の惡癖誠に愧づ可き事です其後次第に年を重ねて弱冠に至るまで外に何も法外な事は働かず行狀は先づ正しい積りでしたが俗に云ふ酒に目のない少年で酒を見ては殆んど廉耻を忘れるほどの意氣地なしと申して宜しい

ソレカラ長崎に出たとき二十一歳とは云ひながら其實は十九歳餘りマダ丁年にもならぬ身で立派な酒客、唯飲みたくて堪らぬ所が兼ての宿願を達して學問修業とあるから自分の本心に訴へて何としても飲

むことは出來ず滯留一年の間死んだ氣になつて禁酒しました山本先生の家に食客中も大きな宴會でもあれば其時に盜んで飮むことは出來る又錢さへあれば町に出て一寸と升の角から遣るのも易いが何時か一度は露顯すると思てトウ〳〵辛抱して一年の間正體を現はさずに翌年の春長崎を去て諫早に來たとき始めてウント飮んだ事がある其後程經て文久元年の冬洋行するとき長崎に寄港して二日ばかり滯在中山本の家を尋ねて先年中の禮を述べ今度洋行の次第を語り其とき始めて酒の事を打明け下戸とは僞り實は大酒飮だと白狀して飮んだも飮んだが恐ろしく飮んで先生夫婦を驚かした事を覺えて居ます

此通り幼少の時から酒が數寄で酒の爲めには有らん限りの惡い事をして隨分不養生も犯しましたが又一方から見ると私の性質として品行は正しい是れだけは少年時代亂暴書生に交つても家を成して後世の中に交際しても少し人に變つて大きな口が利かれる滔々たる濁水社會にチト變人のやうに窮屈なやうにあるが左ればとて實際浮氣な花柳談と云ふことは大抵事細に知て居る何故と云ふに他人の夢中になつて汚ない事を話して居るのを能く注意して聞て心に留めて置くから何でも分らぬことはない例へば私は元來圍碁を知らぬ少しも分らないけれども塾中の書生仲間に圍碁が始まるとジャ〳〵張り出て巧者なことを云てヤア黑の其手は間違ひだ夫れ又やられたではないか油斷をすると此方の方が危いぞ馬鹿な奴だあれを知らぬかなどと宜い加減に饒舌れば書生の素人の拙圍碁で助言は固より勝手次第で何方が負けさうなと云ふ事は双方の顏色を見て能く分るから勝つ方の手を譽めて負ける方を惡くさへ云へば間違ひはないソコデ私は中々圍碁が強いやうに見えて「福澤一番遣らうか」と云はれると「馬鹿云ふ

な君達を相手にするのは手間潰しだそんな暇はない」と高くとまつて澄し込んで居るからいよ〳〵上手のやうに思はれて凡そ一年ばかりは胡麻化して居たが何かの拍子にツイ化の皮が現はれて散々罵しられたことがある、と云ふやうなもので花柳社會の事も他人の話を聞き其様子を見て大抵こまかに知て居る、知て居ながら自分一身は鐵石の如く大丈夫であるマア申せば血に交はりて赤くならぬとは私の事でせう自分でも不思議のやうにあるが是れは如何しても私の家の風だと思ひます幼少の時から兄弟五人他人まぜずに母に育てられて次第に成長しても汚ない事は假初にも蔭にも日向にも家の中で聞た事もなければ話した事もない清浄潔白自から同藩普通の家族とは色を異にしてソレカラ家を去て他人に交はつても其風をチヤント守て別に愼むでもない當然な事だと思て居た、ダカラ緒方の塾に居る其間も遂ぞ茶屋遊をするとか云ふやうな事は決してない、と云ひながら前にも云ふ通り何も偏屈で夫れを嫌つて恐れて逃げて廻つて蔭で理屈らしく不平な顔をして居ると云ふやうな事も頓としない、遊廓の話、茶屋の話、同窓生と一緒になつてドシ〳〵話をして問答して而して私は夫れを又冷かして「君達は誠に野暮な奴だ茶屋に行てフラレて來ると云ふやうな馬鹿があるか、僕は登樓は爲ない、爲ないけれども僕が一度び奮發して樓に登れば君達の百倍被待て見せやう君等のやうなソンナ野暮な事をするなら止して仕舞へドウセ登樓などの出來さうな柄でない田舎者めが都會に出て來て茶屋遊のABCを學んで居るなんてソンナ鈍いことでは生涯役に立たぬぞ」と云ふやうな調子で哦鳴り廻つて實際に於て其哦鳴る本人は決して浮氣でない、ダカラ人が私を馬鹿にすることは出來ぬ、能く世間にある徳行の君子なんて云ふ學者がム

ヅ〳〵してシント考へて他人の爲ることを惡い〳〵と心の中で思て不平を呑で居る者があるが私は人の言行を見て不平もなければ心配もない一緒に戯れて酒蛙々々として居るから却て面白い

酒の話は幾らもあるが安政二年の春始めて長崎から出て緒方の塾に入門した其卽日に在塾の一書生が始めて私に逢て云ふには「君は何處から來たか」「長崎から來た」と云ふのが話の始まりで其書生の云ふに「爾うか以來は懇親にお交際したい就ては酒を一献酌まうではないか」と云ふから私が之に答へて「始めてお目に掛て自分の事を云ふやうであるが私は元來の酒客然かも大酒だ一献酌まうとは有難い是非お供致したい早速お供致したいだが念の爲めに申して置くが私には金はない實は長崎から出て來たばかりで塾で修業する其學費さへ甚だ怪しい有るか無いか分らない況や酒を飲むなどと云ふ金は一錢もない是れだけは念の爲めにお話して置くが酒を飲みにお誘とは誠に辱ない是非お供致さう」と斯う出掛けた、所が其書生の云ふに「そんな馬鹿げた事があるものか酒を飲みに行けば金の要るのは當然の話だ夫ればかりの金のない筈はないぢやないかと云ふ「何と云はれてもない金はないが折角飲みに行かうと云ふお誘だから是非行きたいものぢや」と云ふのが物分れで其日は仕舞ひ翌日も屋敷から通つて塾に行て其男に出遇ひ「昨日のお話は立消になつたが如何だらうか私は今日も酒が飲みたい、連れて行て呉れないかどうも行きたい」と此方から促した處が「馬鹿云ふな」と云ふやうな事でお別れになつて仕舞た

ソレカラ一月經ち二月三月經つて此方もチャント塾の勝手を心得て人の名も知れば顔も知ると云ふことになつて當り前に勉強して居る一日其今の男を引捕まへた、引捕まへて面談「お前は覺えて居るだらう

乃公が長崎から來て始めて入門した其日に何と云た酒を飲みに行かうと云たぢやないか其意味は新入生と云ふものは多少金がある之を誘出して酒を飲まうと斯う云ふ考だらう言はずとも分て居る彼の時に乃公が何と云た乃公は酒は飲みたくて堪らないけれども金がないから飲むことは出來ないと刎付けて其翌日は又此方から促した時にお前は半句の言葉もなかつたぢやないか能く考へて見ろ憚り乍ら諭吉だから其位に強く云たのだ乃公は其時には自から決する處があつたお前が愚圖々々云ふなら卽席に叩倒して先生の處に引摺て行て遣らうと思た其決心が顏色に顯れて怖かつたのか知らぬがお前はどうもせずに引込んで仕舞た如何にしても濟まない奴だ斯う云ふ奴のあるのは塾の爲めには獅子身中の蟲と云ふものだ、こんな奴が居て塾を卑劣にするのだ以來新入生に遇て假初にも左樣な事を云ふと乃公は他人の事とは思はぬぞ直ぐにお前を捕まへて誰とも云はず先生の前に連れて行て先生に裁判して貰ふが宜しいか心得て居ろ」と酷く懲しめて遣た事があつた

其後私の學問も少しは進歩した折柄先輩の人は國に歸る、塾中無人にて遂に私が塾長になつた扨塾長になつたからと云て元來の塾風で塾長に何も權力のあるのではなし唯塾中一番六かしい原書を會讀するとき其會頭を勤める位のことで同窓生の交際に少しも輕重はない塾長殿も以前の通りに讀書勉强して勉强の間にはあらん限りの活動ではないどうかと云へば先づ亂暴をして面白がつて居ることだから其亂暴生が德義を以て人を感化するなど云ふ鹿爪らしい事を考へる譯けもない又塾風を善くすれば先生に對しての御奉公御恩報じになるとそんな老人めいた心のあらう筈はないが唯私の本來假初にも弱い

者いじめをせず假初にも人の物を貪らず人の金を借用せず唯の百文も借りたることはない其上に品行は清淨潔白にして俯仰天地に愧ずと云ふ自から外の者と違ふ處があるから一緒になつてワイ〳〵云て居ながらマア一口に云へば同窓生一人も殘らず自分の通りになれ又自分の通りにして遣らうと云ふやうな血氣の威張りであつたらうと今から思ふだけで決して道德とか仁義とか又大恩の先生に忠義とかそんな奥ゆかしい事は更らに覺えはなかつたのです併し何でも爾う威張り廻つて暴れたのが塾の爲めに惡い事もあらう又自から役に立たこともあるだらうと思ふ若し役に立て居れば夫れは偶然で決して私の手柄でも何でもありはしない

緒方の塾風

左樣云へば何か私が緒方塾の塾長で頻りに威張て自然に塾の風を矯正したやうに聞ゆるけれども又一方から見れば酒を飲むことでは隨分塾風を荒らした事もあらうと思ふ塾長になつても相替らず元の貧書生なれども其時の私の身の上は故鄕に在る母と姪と二人は藩から貰ふ少々ばかりの家祿で暮して居る、私は塾長になつてから表向に先生家の賄を受けて其上に新書生が入門するとき先生家に束脩を納めて同時に塾長へも金貳朱を呈すと規則があるから一箇月に入門生が三人あれば塾長には一分二朱の收入、五人あれば二分二朱にもなるから小遣錢には澤山で是れが大抵酒の代になる衣服は國の母が手織木綿の品を送て呉れて夫れには心配がないから少しでも手許に金があれば直に飮むことを考へる、是れが爲めには同窓生の中で私に誘はれてツイ〳〵飮だ者も多からう扨その飮みやうも至極お粗末殺風景で

錢の乏しいときは酒屋で三合か五合買て來て塾中で獨り飲む、夫れから少し都合の宜い時には一朱か二朱持て一寸と料理茶屋に行く、是れは最上の奢で容易に出來兼ねるから先づ度々行くのは鷄肉屋夫れよりモット便利なのは牛肉屋だ其時大阪中で牛鍋を喰はせる處は唯二軒ある一軒は難波橋の南詰一軒は新町の廓の側にあつて最下等の店だから凡そ人間らしい人で出入する者は決してない文身だらけの町の破落戸と緒方の書生ばかりが得意の定客だ何處から取寄せた肉だか、殺した牛やら病死した牛やらそんな事には頓着なし一人前百五十文ばかりで牛肉と酒と飯と十分の飲食であつたが牛は隨分硬くて臭かつた

當時は士族の世の中だから皆大小は挾して居る、けれども內塾生五六十人の中で私は元來物を質入れしたことがないから双刀はチヤント持て居る其外塾中に二腰か三腰もあつたが、跡は皆質に置て仕舞て塾生の誰か所持して居る其刀が恰も共有物で是れでも差支のないと云ふは銘々倉屋敷にでも行くときに二本挾すばかりで不斷は脇差一本、たゞ丸腰にならぬ丈けの事であつたから、夫れから大阪は暖い處だから冬は難澁な事はないが夏は眞實の裸體、褌も襦袢も何もない眞裸體、勿論飯を喫ふ時と會讀をする時には自から遠慮するから何か一枚ちよいと引掛ける中にも絽の羽織を眞裸體の上に着てる者が多い是れは餘程をかしな風で今の人が見たらさぞ笑ふだらう、食事の時には迚も坐つて喰ふなんと云ふことは出來た話でない足も踏立てられぬ板敷だから皆上草履を穿て立て喰ふ、一度は銘々に別けてやつたこともあるけれども爾うは續かぬお鉢が其處に出してあるから銘々に茶碗に盛て百鬼立食、ソンナ譯けだから食物の價も勿論安いお菜は一六が

葱と薩摩芋の難波煮、五十が豆腐汁、三八が蜆汁と云ふやうになつて居て今日は何が出ると云ふことは極つて居る

裸體の事に就て奇談がある或る夏の夕方私共五六名の中に飲む酒が出來た、すると一人の思付に此酒を彼の高い物干の上で飲みたいと云ふに全會一致でサア屋根づたひに持出さうとした處が物干の上に下婢が三四人涼んで居る是れは困た今彼處で飲むと彼奴等が奥に行て何か饒舌るに違ひない邪魔な奴ぢやと云ふ中に長州生に松岡勇記と云ふ男がある至極元氣の宜い活潑な男で此松岡の云ふに僕が見事に彼の女共を物干から逐拂て見せやうと云ひながら眞裸體で一人ツカ〳〵と物干に出て行き「お松どんお竹どん暑いぢやないか」と言葉を掛けて其まゝ仰向きに大の字なりに成て倒れた此風體を見ては流石の下婢も其處に居ることが出來ぬ、氣の毒さうな顏をして皆下りて仕舞

た、すると松岡が物干の上から蘭語で上首尾早く來いと云ふ合圖に塾部屋の酒を持出して涼しく愉快に飲だことがある

又或るとき是れは私の大失策、或る夜私が二階に寢て居たら下から女の聲で「福澤さん〳〵」と呼ぶ、私は夕方酒を飲で今寢たばかり、うるさい下女だ今ごろ何の用があるかと思ふけれども呼べば起きねばならぬ、夫れから眞裸體で飛起て階子段を飛下りて「何の用だ」とふんばたかつた所が案に相違、下女ではあらで奥さんだ「何うにも斯うにも逃げやうにも逃げられず眞裸體で坐つてお辭儀も出來ず進退窮して實に身の置處がない、奥さんも氣の毒だと思はれたのか物をも云はず奥の方に引込で仕舞た翌朝御詫に出て昨夜は誠に失禮仕りましたと陳べる譯けにも行かず到頭末代御挨拶なしに濟で仕舞た事がある是ればかりは生涯忘れることが出來ぬ先年も大阪に行て緒方の家を尋ねて此階

子段の下だつたと四十年前の事を思出して獨り心の中で赤面しました

塾風は不規則と云はんか不整頓と云はんか亂暴狼藉、丸で物事に無頓着、その無頓着の極は世間で云ふやうに潔不潔、汚ないと云ふことを氣に止めない例へば塾の事であるから勿論桶だの丼だの皿などのあらう筈はないけれども緒方の塾生は學塾の中に居ながら七輪もあれば鍋もあつて物を煮て喰ふと云ふやうな事を不斷遣て居る、其趣は恰も手鍋世帶の臺所見たやうな事を机の周圍で遣て居た、けれども道具の足ると云ふことのあらう筈はない、ソコで洗手盥も金盥も一切食物調理の道具になつて、暑中など何處からか素麺を貰ふと其素麺を奥の臺所で湯煮て貰ふて其素麺を冷すには毎朝顔を洗ふ洗手盥を持て來て其中で冷素麺にして汁を拵へるに調合所の砂糖でも盗み出せば上出來、其外肴を拵へるにも野菜を洗ふにも洗手盥は唯一のお道具でソンナ事は少しも汚ないと思はなかつた

夫れ所ではない虱は塾中永住の動物で誰れ一人も之を免かれることは出來ない一寸と裸體になれば五疋も十疋も捕るに造作はない春先き少し暖氣になると羽織の襟に匍出すことがある或る書生の説に「ドウダ吾々〳〵の虱は大阪の燒芋に似て居る冬中が眞盛りで春になり夏になると次第に衰へて暑中二三箇月蚤と交代して引込み九月頃新芋が町に出ると吾々の虱も復た出て來るのは可笑しい」と云た事がある私は一案を工風し抑も虱を殺すに熱湯を用ふるは洗濯婆の舊筆法で面白くない乃公が一發で殺して見せやうと云て嚴冬の霜夜に襦袢を物干に晒して虱の親も玉子も一時に枯らしたことがある此工風は私の新發明ではない曾て誰れかに聞たことがあるから遣て見たのです

そんな譯けだから塾中の書生に身なりの立派な者は先づ少ない其くせ市中の縁日など云へば夜分屹度出て行く、行くと往來の群集就中娘の子などはアレ書生が來たと云て脇の方に避ける其様子は何か穢多でも出て來て夫れを穢ながるやうだ、如何も仕方がない往來の人から見て穢多のやうに思ふ筈だ或るとき難波橋の吾々得意の牛鍋屋の親爺が豚を買出して來て、牛屋商賣であるが氣の弱い奴で自分に殺すことが出來ぬからと云て緒方の書生が目指された、夫れから親爺に逢て「殺して遣るが殺す代りに何を呉れるか」――「左様ですな」――「頭を呉れるか」――「頭なら上げませう」夫れから殺しに行た此方は流石に生理學者で動物を殺すに窒塞させれば譯けはないと云ふことを知て居る幸ひ其牛屋は河岸端であるから其處へ連て行て四足を縛て水に突込で直ぐ殺した、そこでお禮として豚の頭を貰つて來て奥から鉈を借りて來て先づ解剖的に腦だの眼だの能く〳〵調べて散々いぢくつた跡を煮て喰たことがある是れは牛屋の主人から穢多のやうに見込れたのでせう

それから又或時には斯う云ふ事があつた道修町の藥種屋に丹波か丹後から熊が來たと云ふ觸込み或る醫者の紹介で後學の爲め解剖を拜見致したいから誰か來て熊を解剖して呉れぬかと塾に云て來た「それは面白い」當時緒方の書生は中々解剖と云ふことに熱心であるから早速行て遣らうと云ふので出掛けて行く、私は醫者でないから行かぬが塾生中七八人行きました夫から解剖して是れが心臟で是れが肺、是れが肝と説明して遣た所が「誠に有難い」と云て藥種屋も醫者もふつと歸つて仕舞た其實は彼等の考に緒方の書生に解剖して貰へば無疵に熊膽が取れると云ふことを知て居るものだから解剖に託して熊膽が出

るや否や歸て仕舞たと云ふ事がチャンと分たから書生さん中々了簡しない是れは一番こねくつて遣らうと塾中の衆議一決、直にそれ〳〵掛りの手分けをした塾中に雄辯滔々と能く喋舌て誠に剛情なシツコイ男がある田中發太郎(今は新吾と改名して加賀金澤に居る)と云ふ是れが應接掛、それから私が掛合手紙の原案者で、信州飯山から來て居る書生で菱湖風の書を善く書く沼田芸平と云ふ男が原案の清書する夫れから先方へ使者に行くのは誰れ、脅迫するのは誰れとどうにも斯うにも手に餘る奴ばかりで動もすれば手短に打毀しに行くと云ふやうな風を見せる奴もある又彼方から來れば捏くる奴が控へて居る何でも六七人手勢を揃へて拈込で理屈を述べることは筆にも口にも隙はない應接掛りは不斷の眞裸體に似ず袴羽織にチャンと脇差を挾して緩急剛柔ツマリ學醫の面目云々を楯にして剛情な理屈を云ふからサア先方の醫者も困て仕舞ひ、そこで平あやまりだと云ふ、只謝るだけで濟めば宜いが酒を五升に鷄と魚か何かを持て來て、それで手を拍て塾中で大に飲みました

それに引換へて此方から取られたことがある道頓堀の芝居に與力や同心のやうな役人が見廻りに行くとズット棧敷に通て芝居の者共が茶を持て來る菓子を持て來るなどして大威張りで芝居をたゞ見る、兼て其樣子を知て居るから緒方の書生が氣味の惡い話サ大小を挾して宗十郎頭巾冠て其役人の眞似をして度々行て首尾能く芝居見物して居た所が度重なれば顯はれるの諺に洩れず或る日、本者が來たサア此方は何とも云はれないだらう詐欺だから役人を僞造したのだから、其時はこねくられたとも何とも進退谷まり大騒ぎになつて夫れから玉造の與力に少し由縁を得てソレに泣付て内濟を賴でヤット無事に收

まつた其とき酒を持て行たり肴を持て行たりして何でも金にして三歩ばかり取られたと思ふ此詐欺の一件は丹後宮津の高橋順益と云ふ男が頭取であつたが私は元來芝居を見ない上に此事を不安心に思ふて「それは餘り宜くなからうマサカの時は大變だから」と云たが肯ない「何に譯けはない自から方便あり」なんてヅゥ〳〵しく遣て居たがとう〳〵捕まつたのが可笑しい所か一時大心配をした

それから時としては斯う云ふ事もあつた其亂暴さ加減は今人の思寄らぬことだ警察がなかつたから云はゞ何でも勝手次第である元來大阪の町人は極めて臆病だ江戸で喧嘩をすると野次馬が出て來て滅茶苦茶にして仕舞ふが大阪では野次馬は迚ても出て來ない夏の事で夕方飯を喰てブラ〳〵出て行く申合をして市中で大喧嘩の眞似をするお互に痛くないやうに大造な劍幕で大きな聲で怒鳴て摑合ひ打合ふだらう爾うすると其邊の店はバタ〳〵片付けて戸を締めて仕舞ふて寂りとなる喧嘩と云た所が唯それだけの事で外に意味はない其法は同類が二三人づゝ分れて一番繁昌な賑やかな處で双方から出逢ふやうな仕組にするから賑やかな處と云へば先づ遊廓の近所新町九軒の邊で常極りに遣て居たが併し餘り一箇所で遣て化の皮が顯れるとイカヌから今夜は道頓堀で遣らう順慶町で遣らうと云て遣たこともある信州の沼田芸平などは餘ほど喧嘩の上手であつた

それから一度は斯う云ふ事があつた私と先輩の同窓生で久留米の松下元芳と云ふ醫者と二人連で御靈と云ふ宮地に行て夜見世の植木を冷かしてる中に植木屋が「旦那さん惡さをしてはいけまへん」と云たのは吾々の風體を見て萬引をしたと云ふ意味だからサア了簡しない丸で辨天小僧見たやうに拈繰返した「何でも此野郎を打殺して仕舞へ理

屈を云はずに打殺して仕舞へ」と私が呶鳴る松下は慰めるやうな風をして「マア殺さぬでも宜いぢやないか」「ヤア面倒だ一打に打殺して仕舞ふから止めなさんな」と夫れ是れする中に往來の人は黒山のやうに集まつて大混雜になつて來たから此方は尚ほ面白がつて威張て居ると御靈の善哉屋の餅搗か何かして居る角力取が仲裁に這入て來て「どうか宥して遣て下さい」と云ふから「よし貴樣が中に這入れば宥して遣る併し明日の晩此處に見世を出すと打殺して仕舞ふぞ折角中に這入たから今夜は宥して遣るから」と云て翌晩行て見たら正直な奴だ植木屋の處だけ土場見世を休んで居た今のやうに一寸も警察と云ふものがなかつたから亂暴は勝手次第けれども存外に惡い事をしない一寸この植木見世位の話で實のある惡事は決してしない

私が一度大に恐れたことは是れも御靈の近處で上方に行はれる砂持

と云ふ祭禮のやうな事があつて町中の若い者が百人も二百人も燈籠を頭に掛けてヤイ〳〵云て行列をして町を通る、書生三四人して之を見物して居る中に私が如何いふ氣であつたか何れ酒の機嫌でせう杖か何かで其頭の燈籠を打落して遣た、スルト其連中の奴と見えるチボぢや〳〵と怒鳴り出した大阪でチボ(スリ)と云へば理非を分たず打殺して川に投り込む習はしだから、私は本當に怖かつた何でも逃げるに若かずと覺悟をして跣になつて堂島の方に逃げた其時私は脇差を一本挾して居たから若し追付れるやうになれば後向て進で斬るより外仕方がない斬ては誠に不味い假初にも人に疵を付ける了簡はないから唯一生懸命に駈けて堂島五丁目の奥平の倉屋敷に飛込でホツト呼吸をした事がある

又大阪の東北の方に葭屋橋と云ふ橋がある其橋手前の處を築地と云

て在昔は誠に如何な家ばかり並んで居てマア待合をする地獄屋とでも云ふやうな內實穢ない町であつたが其築地の入口の角に地藏樣か金比羅樣か知らん小さな堂がある中々繁昌の樣子で其處に色々な額が上げてある或は男女の拜んでる處が畫いてある何か封書が額に貼付けてある、又は髻が切て結ひ付けてある夫れを晝の中に見て置て夜になると其封書や髻のあるのを引さらへて塾に持て歸て開封して見ると種々樣々の願が掛けてあるから面白い「ハヽア是れは博奕を打た奴が止ると云ふのか、是れは禁酒だ、是れは難船に助かつたお禮、此方のは女狂にこり〳〵した奴だ、夫れは何歳の娘が妙な事を念じて居る」など唯それを見るのが面白くて毎度遣た事だが兎に角人の一心を籠めた祈願を無茶苦茶にするとは罪の深いことだ無神無佛の蘭學生に逢ては仕方がない

夫れから塾中の奇談を云ふと其ときの塾生は大抵みな醫者の子弟だから頭は坊主か總髮で國から出て來るけれども大阪の都會に居る間は半髮になつて天下普通の武家の風がして見たい今の眞宗坊主が毛を少し延ばして當然の斷髮の眞似をするやうな譯けで內實の醫者坊主が半髮になつて刀を挾して威張るのを嬉しがつて居る、其時江戸から來て居る手塚と云ふ書生があつて此男は或る德川家の藩醫の子であるから親の拜領した葵の紋付を着て頭は塾中流行の半髮で太刀作の刀を挾てると云ふ風だから如何にも見榮があつて立派な男であるが如何も身持が善くないソコデ私が或る日手塚に向て「君が本當に勉強すれば僕は毎日でも講釋をして聞かせるから何は扨置き北の新地に行くことは止しなさい」と云たら當人も其時は何か後悔した事があると見えて「アヽ新地か今思出しても忌だ決して行かない」「それなら屹

度君に教へて遣るけれどもマダ疑はしい、行かないと云ふ證文を書け」「宜しい如何な事でも書く」と云ふから云々今後屹度勉強する若し違約をすれば坊主にされても苦からずと云ふ證文を書かせて私の手に取て置て約束の通りに毎日別段に教へて居た所が其後手塚が眞實勉強するから面白くない斯う云ふのは全く此方が悪い、人の勉強するのを面白くないとは怪しからぬ事だけれども何分興がないから窃と兩三人に相談して「彼奴の馴染の遊女は何と云ふ奴か知ら」「それは直ぐに分る何々といふ奴」「よし、それならば一つ手紙を遣らう」と夫れから私が遊女風の手紙を書く片言交りに彼等の云ひさうな事を並べ立て、何でも彼の男は無心を云はれて居るに相違ない其無心は屹度麝香を呉れろとか何とか云はれた事があるに違ひないと推察して文句の中に「ソレあのとき役足のじやこはどておます」と云ふやうな判じて讀まねば分らぬやうな事を書入れて鐵川様何々よりと記して手紙は出來たが併し私の手蹟ぢや不味いから長州の松岡勇記と云ふ男が御家流で女の手に紛らはしく書いてソレカラ玄關の取次をする書生に云含めて「是れを新地から來たと云て持て行け併し事實を云へば打撲るぞ宜しいか」と脅迫して夫れから取次が本人の處に持て行て鐵川と云ふ人は塾中にない多分手塚君のことゝ思ふから持て來たと云て渡した、手紙僞造の共謀者は其前から見え隱れに様子を窺ふて居た所が本人の手塚一人で頻りに其手紙を見て居る麝香の無心があつた事か如何か分らないが手塚の二字を大阪なまりにテツカと云ふ其テツカを鐵川と書いたのは高橋順益の思付で餘ほど善く出來てる、そんな事で如何やら斯うやら遂に本人をしやくり出して仕舞たのは罪の深い事だ二三日は止まつて居たが果して行たから、ソリヤ締めたと共謀者は待て居る

翌朝歸て平氣で居るから此方も平氣で私が鋏を持て行てひよいと引捕へた所が手塚が驚いて「どうする」と云ふから「どうするも何もない坊主にするだけだ坊主にされて今のやうな立派な男になるには二年ばかり手間が掛るだらう往生しろ」と云て髻を捕へて鋏をガチャ〳〵云はせると當人は眞面目になつて手を合せて拜む、さうすると共謀者中から仲裁人が出て來て「福澤餘り酷いぢやないか」「何も文句なしぢやないか坊主になるのは約束だ」と問答の中に馴合の中人が段々取持つやうな風をして果ては坊主の代りに酒や鷄を買はして一處に飲みながら又冷かして「お願ひだもう一度行て呉れんか又飲めるから」とワイワイ云たのは隨分亂暴だけれどもそれが自から切諫になつて居たこともあらう

同窓生の間には色々くな事のあるもので肥後から來て居た山田謙輔と云ふ書生は極々くの御幣擔でしの字を言はぬ、其時今の市川團十郎の親の海老藏が道頓堀の芝居に出て居るときで芝居の話をすると山田は海老藏のよばゐを見るなんて云ふ位な御幣擔だから性質は至極立派な人物だけれども如何も蘭學書生の氣に入らぬ筈だ何か話の端には之を愚弄して居ると山田の云ふに「福澤々々君のやうに無法な事ばかり云ふがマア能く考へて見給へ正月元日の朝年禮に出掛けた時に葬禮に逢ふと鶴を臺に載せて擔で來るのを見ると何方が宜いか」と云ふから私は「それは知れた事だ死人は喰はれんから鶴の方が宜い、けれども鶴だつて乃公に喰はせなければ死人も同じ事だ」と答へたやうな鹽梅式で何時も冷かして面白がつて居る中に或るとき長與專齋が誰れかと相談して彼奴を一番大に遣てやらうぢやないかと一工風して當人の不在の間に其硯に紙を巻いて位牌を拵へて長與の書が旨いから

立派に何々院何々居士と云ふ山田の法名を書いて机の上に置て當人の飯を喰ふ茶碗に灰を入れて線香を立てゝ位牌の前にチャンと供へて置た所が歸て來て之を見て忌な顏をしたとも何とも眞青になつて腹を立てゝ居たが私共は如何も怖かつた若しも短氣な男なら切付けて來たかも知れないから

夫れから又一度遣た後で怖いと思たのは人をだまして河豚を喰はせた事だ私は大阪に居るとき颯々と河豚も喰へば河豚の肝も喰て居た或る時藝州仁方から來て居た書生三刀元寛と云ふ男に鯛の味噌漬を貰て來たが喰はぬかと云ふと「有難い成程宜い味がする」と悦んで喰て仕舞て二時間ばかり經てから「イヤ可哀さうに今喰たのは鯛でも何でもない中津屋敷で貰た河豚の味噌漬だ食物の消化時間は大抵知てるだらう今吐劑を飲でも無益だ河豚の毒が嘔かれるなら嘔て見ろ」と云たら三刀も醫者の事だから能く分て居るサア氣を揉で私に武者振付くやうに腹を立てたが私も後になつて餘り洒落に念が入過ぎたと思て心配した隨分間違の生じ易い話だから

前に云ふ通り御靈の植木見世で萬引と疑はれたが疑はれる筈だ緒方の書生は本當に萬引をして居た其萬引と云ふは呉服店で反物なんど云ふ念の入た事ではない料理茶屋で飲だ歸りに猪口だの小皿だの色々手ごろな品を窃と盜んで來るやうな萬引である同窓生互に夫れを手柄のやうにして居るから送別會などゝ云ふ大會のときには獲物も多い、中には昨夜の會で團扇の大きなのを脊中に入れて歸る者もあれば平たい大皿を懷中し吸物椀の蓋を袂にする者もある又或る奴は「君達がそんな半端物を舉げて來るのはまだ拙ない乃公の獲物を拜見し給へ」と云て小皿を十人前揃へて手拭に包んで來たこともある今思へ

ば是れは茶屋でもトックに知て居ながら默つて通して實は其盜品の勘定も拂の內に這入て居るに相違ない每度の事でお極りの盜坊だから其小皿に緣のある一奇談は或る夏の事である夜十時過ぎになつて酒が飮みたくなつて鳴呼飮みたいと一人が云ふと僕も爾うだと云ふ者が直に四五人出來た所がチャンと門限があつて出ることが出來ぬから當直の門番を脅迫して無理に開けさして鍋島の濱と云ふ納凉の葭簀張で不味いけれども芋蛸汁か何かで安い酒を飮で歸りに例の通りに小皿を五六枚擧げて來た夜十二時過でもあつたか難波橋の上に來たら下流の方で茶船に乘てジャラ〳〵三味線を鳴らして騷いで居る奴がある「あんな事をして居やがる此方は百五十か其處邊の金を見付出して漸く一盃飮で歸る所だ忌々しい奴等だあんな奴があるから此方等が貧乏するのだ」と云ひさま私の持てる小皿を二三枚投付けた

ら一番仕舞の一枚で三味線の音がプッツリ止んだ其時は急いで迯げたから人が怪我をしたかどうか分らなかつた所が不思議にも一箇月ばかり經て其れが能く分つた塾の一書生が北の新地に行て何處かの席で藝者に逢ふたとき其藝者の話に「世の中には酷い奴もある一箇月ばかり前の夜に私がお客さんと舟で難波橋の下で凉んで居たら橋の上からお皿を投げて丁度私の三味線に中つて裏表の皮を打拔きましたが本當に危ない事で先づ〳〵怪我をせんのが仕合でした何處の奴か四五人連れで其皿を投げて置て南の方にドン〳〵迯げて行きました實に憎らしい奴もあればあるもの」と斯う〳〵藝者が話して居たと云ふのを私共は夫れを聞て下手人にはチャント覺えがあるけれども云へば面倒だから其同窓の書生にも其時には隱して置いた

又私は酒の爲めに生涯の大損をして其損害は今日までも身に附て居

ると云ふ其次第は緒方の塾に學問修業しながら兎角酒を飮で宜いことは少しもない是れは濟まぬ事だと思ひ恰も一念こゝに發起したやうに斷然酒を止めた、スルト塾中の大評判ではない大笑で「ヤア福澤が昨日から禁酒したコリヤ面白いコリヤ可笑しい何時まで續くだらう迚も十日は持てまい三日禁酒で明日は飮むに違ひない」なんて冷かす者ばかりであるが私も中々〱剛情に辛抱して十日も十五日も飮まずに居ると親友の高橋順益が「君の辛抱はエライ能く續く、見上げて遣るぞ、所が凡そ人間の習慣は假令ひ惡い事でも頓に禁ずることは宜しくない到底出來ない事だから君がいよ〳〵禁酒と決心したらば酒の代りに烟草を始めろ、何か一方に樂しみが無くては叶はぬ」と深切らしく云ふ所が私は烟草が大嫌ひで是れまでも同塾生の烟草を喫むのを散々に惡く云て「こんな無益な不養生な譯の分らぬ物を喫む奴の氣が知れない何は扨置き臭くて穢なくて堪らん乃公の側では喫んで臭れるな」なんて愛想づかしの惡口を云て居たから今になつて自分が烟草を始めるのは如何もきまりが惡いけれども高橋の說を聞けば亦無理でもない「そんなら遣てみやうか」と云てそろ〳〵試ると塾中の者が烟草を臭れたり烟管を貸したり中には是れは極く輕い烟草だと云て態々〱買て來て臭れる者もあると云ふやうな騷ぎは何も本當な深切でも何でもない實は私が不斷烟草の事を惡くばかり云て居たものだから今度は彼奴を喫烟者にして遣らうと寄つて掛つて私を愚弄するのは分つて居るけれども此方は一生懸命禁酒の熱心だから忌な烟を無理に吹かして十日も十五日もそろ〳〵慣らして居る中に臭い辛いものが自然に臭くも辛くもなく段々〱風味が善くなつて來た凡そ一箇月ばかり經て本當の喫煙客になつた處が例の酒だ、何としても忘れられない

卑怯とは知りながら一寸と一盃遣て見ると堪らないモウ一盃これでお仕舞と力んでも德利を振て見て音がすれば我慢が出來ないとう〳〵三合の酒を皆飮で仕舞て又翌日は五合飮む五合三合從前の通りになつて去らば煙草の方は喫まぬむかしの通りにしやうとしても是れも出來ず馬鹿々々しいとも何とも譯けが分らない迚も叶はぬ禁酒の發心一箇月の大馬鹿をして酒と煙草と兩刀遣ひに成り果て六十餘歳の今年に至るまで酒は自然に禁じたれども煙草は止みさうにもせず衞生の爲め自から作せる損害と申して一言の辯解はありません

塾中兎角貧生が多いので料理茶屋に行て旨い魚を喰ふことは先づ六かしい、夜になると天神橋か天滿橋の橋詰に魚市が立つ、マア云はゞ魚の殘物のやうなもので値が安い、夫れを買て來て洗手盥で洗つて机の毀れたのか何かを爼にして小柄を以て拵へると云ふやうな事は毎度遣て居たが私は兼て手の先きが利いてるから何時でも魚洗の役目に廻つて居た頃は三月桃の花の時節で大阪の城の東に桃山と云ふ處があつて盛りだと云ふから花見に行かうと相談が出來た迚も彼方に行て茶屋で飮食ひしやうと云ふことは叶はぬから例の通り前の晩に魚の殘物を買て來て其外氷豆腐だの野菜物だの買調へて朝早くから起きて匆々に拵へてそれを折か何かに詰めてそれから酒を買て凡そ十四五人も同伴があつたらう辨當を順持にして桃山に行てさん〳〵飮食ひして宜い機嫌になつて居る其時に不圖西の方を見ると大阪の南に當て大火事だ日は餘程落ちて昔の七ッ過、サア大變だ丁度其日に長與專齋が道頓堀の芝居を見に行て居る吾々花見連中は何も大阪の火事に利害を感ずるとはないから燒けても燒けぬでも構はないけれども長與が行て居る若しや長與が燒死はせぬか何でも長與を救ひ出さ

なければならぬと云ふので桃山から大阪迄二三里の道をどん〳〵駈けて道頓堀に駈付けて見た所が疾うに燒けて仕舞ひ三芝居あつたが三芝居とも燒けて段々北の方に燒延びて居る長與は如何したらうかと心配したものゝ迚も捜す譯けに行かぬ、間もなく日が暮れて夜になつた、もう夜になつては長與の事は仕方がない「火事を見物しやうぢやないか」と云て其火事の中へどん〳〵這入て行た所が荷物を片付けるので大騷ぎ、それから其荷物を運んで遣らうと云ふので夜具包か何の包か風呂敷包を擔いだり簞笥を擔いだり中々働いて段々進で行くと其時大阪では燒ける家の柱に綱を付けて家を引倒すと云ふことがある其綱を引張つて吳れと云ふ「よし來た」と其綱を引張る、所が握飯を喰せる酒を飮ませる如何も堪へられぬ面白い話だ、散々酒を飮み握飯を喰て八時頃にもなりましたら夫れから一同塾に歸た、所がマダ燒けて居る「もう一度行かうではないか」と又出掛けた其時の大阪の火事と云ふものは誠に樂なもので火の周圍だけは大變騷々しいが火の中へ這入ると誠に靜なもので一人も人が居らぬ位どうもない只其周圍の處に人がドヤ〳〵群集して居るだけである夫れゆゑ大きな聲を出して蹴破つて中へ飛込みさへすれば誠に樂な話だ、中には火消の黑人と緖方の書生だけで大に働いた事があると云ふやうな譯けで隨分活潑な事をやつたことがありました

一體塾生の亂暴と云ふものは是れまで申した通りであるが其塾生同士相互の間柄と云ふものは至て仲の宜いもので決して爭などをしたことはない勿論議論はするいろ〳〵の事に就て互に論じ合ふと云ふことはあつても決して喧嘩をするやうな事は絕てない事で殊に私は性質として朋友と本氣になつて爭ふことはない假令ひ議論をすれば

とて面白い議論のみをして例へば赤穗義士の問題が出て義士は果して義士なるか不義士なるかと議論が始まる、スルト私はどちらでも宜しい、義不義、口の先きで自由自在、君が義士と云へば僕は不義士にする君が不義士と云へば僕は義士にして見せやうサア來い幾度來ても苦くないと云て敵に爲り味方に爲り散々論じて勝たり負けたりするのが面白いと云ふ位な毒のない議論は毎度大聲で遣て居たが本當に顔を赧らめて如何あつても是非を分つて了はなければならぬと云ふ實の入た議論はしたことは決してない凡そ斯ふ云ふ風で外に出ても亦内に居ても亂暴もすれば議論もするソレ故一寸と一目見た所では——今までの話だけを聞た所では如何にも學問どころの事ではなく唯ワイ〳〵して居たのかと人が思ふでありませうが其處の一段に至ては決して爾うでない學問勉強と云ふことになつては當時世の中に緒方塾生の右に出る者はなからうと思はれる其一例を申せば私が安政三年の三月熱病を煩ふて幸に全快に及んだが病中は括枕で坐蒲團か何かを括つて枕にして居たが追々元の體に恢復して來た所で只の枕をして見たいと思ひ其時に私は中津の倉屋敷に兄と同居して居たので兄の家來が一人ある其家來に只の枕をして見たいから持て來いと云たが枕がない、どんなに搜してもないと云ふので不圖思付いた是れまで倉屋敷に一年ばかり居たが遂ぞ枕をしたことがない、と云ふのは時は何時でも構はぬ殆んど晝夜の區別はない日が暮れたからと云て寢やうとも思はず頻りに書を讀んで居る讀書に草臥れ眠くなつて來れば机の上に突臥して眠るか或は床の間の床側を枕にして眠るか遂ぞ本當に蒲團を敷いて夜具を掛けて枕をして寢るなどと云ふことは只の一度もしたことがない其時に始めて自分で氣が付て「成程枕はな

い筈だ是れまで枕をして寢たことはなかつたから」と始めて氣が付きました是れでも大抵趣が分りませう是れは私一人が別段に勉強生でも何でもない同窓生は大抵皆そんなもので凡そ勉強と云ふことに就ては實に此上に爲やうはないと云ふ程に勉強して居ました

それから緒方の塾に這入てからも私は自分の身に覺えがある夕方食事の時分に若し酒があれば酒を飲で初更に寢る、一寢して目が覺ると云ふのが今で云へば十時か十時過それからヒヨイと起きて書を讀む夜明まで書を讀んで居て臺所の方で塾の飯炊がコト／＼飯を焚く仕度をする音が聞えるとそれを合圖に又寢る、寢て丁度飯の出來上つた頃起きて其儘湯屋に行て朝湯に這入てそれから塾に歸て朝飯を給べて又書を讀むと云ふのが大抵緒方の塾に居る間殆んど常極りであつた勿論衞生などゝ云ふことは頓と構はない全體は醫者の塾であるから衞生論も喧しく言ひさうなものであるけれども誰も氣が付かなかつたのか或は思出さなかつたのか、一寸でも喧しく云たことはない、それで平氣で居られたと云ふのは考へて見れば身體が丈夫であつたのか或は又衞生々々と云ふやうなことを無闇に喧しく云へば却て身體が弱くなると思て居たのではないかと思はれる

それから塾で修業する其時の仕方は如何云ふ鹽梅であつたかと申すと先づ始めて塾に入門した者は何も知らぬ、何も知らぬ者に如何して教へるかと云ふと其時江戶で飜刻になつて居る和蘭の文典が二冊ある一をガランマチカと云ひ一をセインタキスと云ふ初學の者には先づ其ガランマチカを教へ、素讀を授る傍に講釋をもして聞かせる、之を一冊讀了るとセインタキスを又其通りにして教へる、如何やら斯うやら二冊の文典が解せる樣になつた所で會讀をさせる會讀と云ふとは

生徒が十人なら十人、十五人なら十五人に會頭が一人あつて其會讀するのを聞て居て出來不出來に依て白玉を附けたり黒玉を付けたりすると云ふ趣向でソコで文典二冊の素讀も濟めば講釋も濟み會讀も出來るやうになると夫れから以上は專ら自身自力の研究に任せることにして會讀本の不審は一字半句も他人に質問するを許さず又質問を試みるやうな卑劣な者もない緒方の塾の藏書と云ふものは物理書と醫書と此二種類の外に何もないソレモ取集めて僅か十部に足らず固より和蘭から舶來の原書であるが一種類唯一部に限つてあるから文典以上の生徒になれば如何しても其原書を寫さなくてはならぬ銘々に寫して其寫本を以て毎月六才位會讀をするのであるが之を寫すに十人なら十人一緒に寫す譯けに行かないから誰が先に寫すかと云ふことは籤で定めるので扨其寫しやうは如何すると云ふに其時には勿論洋紙と云ふものはない皆日本紙で紙を能く磨て眞書で寫す、それはどうも埒があかないから其紙に礬水をして夫れから筆は鵞筆で以て寫すのが先づ一般の風であつた其鵞筆と云ふのは如何云ふものであるかと云ふと其時大阪の藥種屋か何かに鶴か雁かは知らぬが三寸ばかりに切た鳥の羽の軸を賣る所が幾らもある是れは鰹の釣道具にするものとやら聞て居た價は至極安い物でそれを買て磨澄ました小刀で以て其軸をペンのやうに削つて使へば役に立つ夫れから墨も西洋インキのあられやう譯けはない日本の墨壺と云ふのは磨た墨汁を綿か毛氈の切布に浸して使ふのであるが私などが原書の寫本に用ふるのは只墨を磨たまゝ墨壺の中に入れて今日のインキのやうにして貯へて置きます斯う云ふ次第で塾中誰でも是非寫さなければならぬから寫本は中々上達して上手である一例を擧ぐれば一人の人が原書を

讀む其傍で其讀む聲がちやんと耳に這入て颯々と寫してスペルを誤ることがない斯ふ云ふ鹽梅に讀むと寫すと二人掛りで寫したり又一人で原書を見て寫したりして出來上れば原書を次の人に廻す其人が寫了ると又其次の人が寫すと云ふやうに順番にして一日の會讀分は半紙にして三枚か或は四五枚より多くはない扨その寫本の物理書醫書の會讀を如何するかと云ふに講釋の爲人もなければ讀んで聞かして呉れる人もない内證で教へることも聞くことも書生間の耻辱として萬々一も之を犯す者はない唯自分一人で以てそれを讀砕かなければならぬ讀砕くには文典を土臺にして辭書に便る外に道はない其辭書と云ふものは此處にヅーフと云ふ寫本の字引が塾に一部ある是れは中々大部なもので日本の紙で凡そ三千枚ある之を一部拵へると云ふことは中々大きな騷ぎで容易に出來たものではない是れは昔長崎の出島に在留して居た和蘭のドクトル　ヅーフと云ふ人がハルマと云ふ獨逸和蘭對譯の原書の字引を飜譯したもので蘭學社會唯一の寳書と崇められ夫れを日本人が傳寫して緒方の塾中にもたつた一部しかないから三人も四人もヅーフの周圍に寄合て見て居た夫れからモウ一歩立上るとウエーランドと云ふ和蘭の原書の字引が一部あるそれは六册物で和蘭の註が入れてあるヅーフで分らなければウエーランドを見る所が初學の間はウエーランドを見ても分る氣遣はない、夫ゆゑ便る所は只ヅーフのみ會讀は一六とか三八とか大抵日が極つて居ていよ／＼明日が會讀だと云ふ其晩は如何な懶惰生でも大抵寢ることはないヅーフ部屋と云ふ字引のある部屋に五人も十人も群をなして無言で字引を引つゝ勉強して居る夫れから翌朝の會讀になる、會讀をするにも鬮で以て此處から此處までは誰と極めてする會頭は勿

論原書を持て居るので五人なら五人、十人なら十人自分に割當てられた所を順々に講じて若し其者が出來なければ次に廻す又其人も出來なければ其次に廻す其中で解し得た者は白玉、解し傷ふた者は黒玉、夫れから自分の讀む領分を一寸でも滯りなく立派に讀んで了つたと云ふ者は白い三角を付ける是れは只の丸玉の三倍ぐらゐ優等な印で凡そ塾中の等級は七八級位に分けてあつた而して毎級第一番の上席は三箇月を占て居れば登級すると云ふ規則で會讀以外の書なれば先進生が後進生に講釋もして聞かせ不審も聞て遣り至極深切にして兄弟のやうにあるけれども會讀の一段になつては全く當人の自力に任せて構ふ者がないから塾生は毎月六度づゝ試驗に逢ふやうなものだ爾う云ふ譯けで次第々々に昇級すれば殆んど塾中の原書を讀盡して云はゞ手を空うするやうな事になる其時には何か六かしいものはないかと云ふので實用もない原書の緖言とか序文とか云ふやうな者を集めて最上等の塾生だけで會讀をしたり又は先生に講義を願たこともある私などは卽ち其講義聽聞者の一人でありしが之を聽聞する中にも樣々先生の說を聞て其緻密なること其放膽なること實に蘭學界の一大家名實共に違はぬ大人物であると感心したことは毎度の事で講義終り塾に歸て朋友相互に「今日の先生の彼の卓說は如何だい何だか吾々は頓に無學無識になつたやうだ」などと話したのは今に覺えて居ます

市中に出て大に酒を飲むとか暴れるとか云ふのは大抵會讀を仕舞た其晩か翌日あたりで次の會讀までにはマダ四日も五日も暇があると云ふ時に勝手次第に出て行たので會讀の日に近くなると所謂月に六回の試驗だから非常に勉强して居ました書物を能く讀むと否とは人

々の才不才にも依りますけれども兎も角も外面を胡麻化して何年居るから登級するの卒業するのと云ふことは絶えてなく正味の實力を養ふと云ふのが事實に行はれて居たから大概の塾生は能く原書を讀むことに達して居ました

ヅーフの事に就て序ながら云ふことがある如何かすると其時でも諸藩の大名が其ヅーフを一部寫して貰ひたいと云ふ注文を申込で來たことがあるソコで其寫本と云ふことが又書生の生活の種子になつた當時の寫本代は半紙一枚十行二十字詰で何文と云ふ相場である處がヅーフ一枚は横文字三十行位のもので夫れだけの横文字を寫すと一枚十六文、夫れから日本文字で入れてある註の方を寫すと八文只の寫本に較べると餘程割りが宜しい一枚十六文であるから十枚寫せば百六十四文になる註の方ならば其半直八十文になる註を寫す者もあれば横文字を寫す者もあつたソレを三千枚寫すと云ふのであるから合計して見ると中々大きな金高になつて自から書生の生活を助けて居ました今日より考れば何でもない金のやうだけれども其時には決してさうでない一例を申せば白米一石が三分二朱酒が一升百六十四文から二百文で書生在塾の入費は一箇月一分貳朱から一分三朱あれば足る、一分貳朱は其時の相場で凡そ二貫四百文であるから一日が百文より安い、然るにヅーフを一日に十枚寫せば百六十四文になるから餘る程あるので凡そ尋常一樣の寫本をして塾に居られるなどと云ふことは世の中にないことであるが其出來るのは蘭學書生に限る特色の商賣であつたソレに就て一例を擧げれば斯う云ふことがある江戸は流石に大名の居る處で啻にヅーフ計りでなく蘭學書生の爲めに寫本の注文は盛にあつたもので自から價が高い大阪と較べて見れば大變

高い、加賀の金澤の鈴木儀六と云ふ男は江戸から大阪に來て修業した書生であるが此男が元來一文なしに江戸に居て辛苦して寫本で以て自分の身を立てた其上に金を貯へた凡そ一二年辛抱して金を二十兩ばかり拵へて大阪に出て來て到頭其二十兩の金で緒方の塾で學問をして金澤に歸た是れなどは全く蘭書寫本のお蔭である其鈴木の考では寫本をして金を取るのは江戸が宜いが修業するには如何しても大阪でなければ本當な事が出來ないと目的を定めてソレで其金を持て來たのであると話して居ました

夫れから又一方では今日のやうに都て工藝技術の種子と云ふものがなかつた蒸氣機關などは日本國中で見やうと云てもありはせぬ化學の道具にせよ何處にも揃つたものはありさうにもしない揃ふた物どころではない不完全な物もありはせぬ、けれども爾う云ふ中に居なが

ら器械の事にせよ化學の事にせよ大體の道理は知て居るから如何かして實地を試みたいものだと云ふので原書を見て其圖を寫して似寄の物を拵へると云ふことに就ては中々骨を折りました私が長崎に居るとき鹽酸亞鉛があれば鐵にも錫を附けることが出來ると云ふことを聞て知て居る夫れまで日本では松脂ばかりを用ひて居たが松脂では銅の類に錫を流して鍍金することは出來る唐金の鍋に白みを掛けるやうなもので鑄掛屋の仕事であるが鹽酸亞鉛があれば鐵にも錫が着くと云ふので同塾生と相談して其鹽酸亞鉛を作らうとした所が藥店に行ても鹽酸のある氣遣はない自分で拵へなければならぬ鹽酸を拵へる法は書物で分る其方法に依て何うやら斯うやら鹽酸を拵へて之に亞鉛を溶かして鐵に錫を試みて鑄掛屋の夢にも知らぬ事が立派に出來たと云ふやうなことが面白くて堪らぬ或は又ヨジユムを作つ

て見やうではないかと色〱書籍を取調べ天滿の八百屋市に行て昆布荒布のやうな海草類を買て來て夫れを炮烙で煎て如何云ふ風にすれば出來ると云ふので眞黒になつて遣たけれども是れは到頭出來ないそれから今度は硇砂製造の野心を起して先づ第一の必要は鹽酸暗謨尼亞であるが是れも勿論藥店にある品物でない其暗謨尼亞を造るには如何するかと云へば骨……骨よりもつと世話なしに出來るのは鼈甲屋などに馬爪の削屑がいくらもあつて只呉れる肥料にするかせぬか分らぬが行きさへすれば呉れるからそれをドッサリ貰て來て徳利に入れて徳利の外面に土を塗り又素燒の大きな瓶を買て七輪にして澤山火を起し其瓶の中に三本も四本も徳利を入れて徳利の口には瀬戸物の管を附けて瓶の外に出すなど色〱趣向してドシ〱火を扇ぎ立てると管の先きからタラ〱液が出て來る即ち是れが暗謨尼亞である至極旨く取れることは取れるが爰に難澁は其臭氣だ臭いにも臭くないにも何とも云ひやうがない那の馬爪あんな骨類を徳利に入れて蒸燒にするのであるから實に鼻持もならぬそれを緒方の塾の庭の狹い處で遣るのであるから奥で堪らぬ、奥で堪らぬばかりではない流石の亂暴書生も是れには辟易して迚も居られない夕方湯屋に行くと着物が臭くつて犬が吠えると云ふ譯け假令ひ眞裸體で遣ても身體が臭いと云て人に忌がられる勿論製造の本人等は如何でも斯うでもして硇砂と云ふ物を拵へて見ませうと云ふ熱心があるから臭いのも何も構はぬ頻りに試みて居るけれども何分周邊の者が喧しい下女下男迄も胸が惡くて御飯が食べられないと訴へる其れ是れの中でヤット妙な物が出來たは出來たが粉のやうな物ばかりで結晶しない如何しても完全な硇砂にならない加ふるに喧しくて〱堪らぬから一

旦罷めにしたけれども氣強い男はマダ罷めない折角仕掛つた物が出來ないと云ては學者の外聞が惡いとか何とか云ふやうな譯けで私だの久留米の松下元芳、鶴田仙庵等は思切たが二三の人は尚ほ遣た如何したかと云ふと淀川の一番粗末な船を借りて船頭を一人雇ふて其船に例の瓶の七輪を積込んで船中で今の通りの臭い仕事を遣るは宜いが矢張り煙が立て風が吹くと其煙が陸の方へ吹付けられるので陸の方で喧しく云ふ喧しく云へば船を動かして川を上つたり下つたり川上の天神橋天滿橋からズット下の玉江橋邊まで上下に逃げて廻て遣たことがある其男は中村恭安と云ふ讃岐の金比羅の醫者であつた此外にも犬猫は勿論死刑人の解剖その他製藥の試驗は毎度の事であつたが、シテ見ると當時の蘭學書生は如何にも亂暴なやうであるが人の知らぬ處に讀書研究又實地の事に就ても中々勉强したものだ

製藥の事に就ても奇談がある或るとき硫酸を造らうと云ふので樣々大骨折て不完全ながら色の黒い硫酸が出來たから之を精製して透明にしなければならぬと云ふので其日は先づ茶椀に入れて棚の上に上げて置た處が鶴田仙庵が自分で之を忘れて何かの機に其茶椀を棚から落して硫酸を頭から冠り身體に左までの怪我はなかつたが丁度舊暦四月の頃で一枚の袷をヅタ〳〵にした事がある

製藥には兎角徳利が入用だから丁度宜しい塾の近處の丼池筋に米藤と云ふ酒屋が塾の御出入、この酒屋から酒を取寄せて酒は飮で仕舞て徳利の留置き何本でもみんな製藥用にして返さぬと云ふのだから酒屋でも少し變に思たと見え内々塾僕に聞合せると此節書生さんは中實の酒よりも徳利の方に用があると云ふので酒屋は大に驚き其後何としても酒を持て來なくなつて困つた事がある

又筑前の國主黒田美濃守と云ふ大名は今の華族黒田のお祖父さんで緒方洪庵先生は黒田家に出入して勿論筑前に行くでもなければ江戸に行くでもない只大阪に居ながら黒田家の御出入醫と云ふことであつた故に黒田の殿様が江戸出府或は歸國の時に大阪を通行する時分には先生は屹度中ノ嶋の筑前屋敷に伺候して御機嫌を伺ふと云ふ常例であつた或歳安政三年か四年と思ふ筑前侯が大阪通行になると云ふので先生は例の如く中ノ嶋の屋敷に行き歸宅早々私を呼ぶから何事かと思て行て見ると先生が一冊の原書を出して見せて「今日筑前屋敷に行たら斯う云ふ原書が黒田侯の手に這入たと云て見せて呉れられたから一寸と借りて來た」と云ふ之を見ればワンダーベルトと云ふ原書で最新の英書を和蘭に飜譯した物理書で書中は誠に新らしい事ばかり就中エレキトルの事が如何にも詳に書いてあるやうに見える私などが大阪で電氣の事を知たと云ふのは只纔に和蘭の學校讀本の中にチラホラ論じてあるより以上は知らなかつた所が此新舶來の物理書は英國の大家フハラデーの電氣說を土臺にして電池の構造法などがちやんと出來て居るから新奇とも何とも唯驚くばかりで一見直に魂を奪はれた夫れから私は先生に向て「是れは誠に珍らしい原書で御在ますが何時まで此處に拜借して居ることが出來ませうか」と云ふと「左樣さ何れ黒田侯が二晩とやら大阪に泊ると云ふ御出立になるまでは彼處に入用もあるまい」「左樣でございますか一寸と塾の者にも見せたう御在ます」と云て塾へ持て來て「如何だ此原書は」と云つたら塾中の書生は雲霞の如く集つて一冊の本を見て居るから私は二三の先輩と相談して何でも此本を寫して取らうと云ふことに一決して「此原書を唯見たつて何にも役に立たぬ見ることは止めにしてサア寫すのだ併

し千頁もある大部の書を皆寫すことは迚も出來られないから末段のエレキトルの處丈け寫さう一同筆紙墨の用意して惣掛りだと云た所で玆に一つ困る事には大切な黒田様の藏書を毀すことが出來ない毀して手分て遣れば三十人も五十人も居るから瞬く間に出來て仕舞ふがそれは出來ないけれども緒方の書生は原書の寫本に慣れて妙を得て居るから一人が原書を讀むと一人は之を耳に聞て寫すことが出來るソコデ一人は讀む一人は寫すとして寫す者が少し疲れて筆が鈍て來ると直に他の者が交代して其疲れた者は朝でも晝でも直に寢ると斯う云ふ仕組にして晝夜の別なく飯を喰ふ間も煙草を喫む間も休まず一寸とも隙なしに凡そ二夜三日の間にエレキトルの處は申すに及ばず圖も寫して讀合まで出來て仕舞て紙數は凡そ百五六十枚もあつたと思ふ、ソコデ出來ることなら他の處も寫したいと云たが時日が許さないマア〳〵是れだけでも寫したのは有難いと云ふばかりで先生の話に黒田侯は此一冊を八十兩で買取られたと聞て貧書生等は唯驚くのみ固より自分に買ふと云ふ野心も起りはしない愈よ今夕侯の御出立と定まり私共は其原書を撫くり廻し誠に親に暇乞をするやうに別を惜んで還したことがございました夫れから後は塾中にエレキトルの說が全く面目を新にして當時の日本國中最上の點に達して居たと申して憚りません私などが今日でも電氣の話を聞て凡そ其方角の分るのは全く此寫本の御蔭である誠に因縁のある珍らしい原書だから其後度々今の黒田侯の方へひよつと彼の原書はなからうかと問合せましたが彼方でも混雜の際であつたから如何なつたか見當らぬと云ふ可惜い事で御在ます

只今申したやうな次第で緒方の書生は學問上の事に就ては一寸とも

怠つたことはない其時の有様を申せば江戸に居た書生が折節大阪に來て學ぶ者はあつたけれども大阪から態々江戸に學びに行くと云ふものはない行けば則ち教へると云ふ方であつた左れば大阪に限て日本國中粒選のエライ書生の居やう譯けはない又江戸に限て日本國中の鈍い書生ばかり居やう譯けもない然るに何故ソレが違ふかと云ふことに就ては考へなくてはならぬ勿論其時には私なども大阪の書生がエライ〳〵と自慢をして居たけれども夫れは人物の相違ではない江戸と大阪と自から事情が違て居る江戸の方では開國の始とは云ひながら幕府を始め諸藩大名の屋敷と云ふ者があつて西洋の新技術を求むることが廣く且つ急である從て聊かでも洋書を解すことの出來る者を雇ふとか或は飜譯をさせれば其返禮に金を與へるとか云ふやうな事で書生輩が自から生計の道に近い極都合の宜い者になれば大名に抱へられて昨日までの書生が今日は何百石の侍になつたと云ふことも稀にはあつた夫れに引換て大阪は丸で町人の世界で何も武家と云ふものはない從て砲術を遣らうと云ふ者もなければ原書を取調べやうと云ふ者もありはせぬ夫れゆゑ緒方の書生が幾年勉強して何程エライ學者になつても頓と實際の仕事に縁がない則ち衣食に縁がない、縁がないから縁を求めると云ふことにも思ひ寄らぬので然らば何の爲めに苦學するかと云へば一寸と説明はない前途自分の身體は如何なるであらうかと考へた事もなければ名を求める氣もない名を求めぬどころか蘭學書生と云へば世間に惡く云はれるばかりで既に已に燒けに成て居る唯晝夜苦しんで六かしい原書を讀んで面白がつて居るやうなもので實に譯けの分らぬ身の有様とは申しながら一歩を進めて當時の書生の心の底を叩いて見れば自から樂しみがある之

を一言すれば——西洋日進の書を讀むことは日本國中の人に出來ない事だ自分達の仲間に限て斯樣事が出來る貧乏をしても難澁をしても粗衣粗食一見看る影もない貧書生でありながら智力思想の活潑高尚なることは王侯貴人も眼下に見下すと云ふ氣位で唯六かしければ面白い苦中有樂苦即樂と云ふ境遇であつたと思はれる喩へば此藥は何に利くか知らぬけれども自分達より外にこんな苦い藥を能く呑む者はなからうと云ふ見識で病の在る所も問はずに唯苦ければもつと呑で遣ると云ふ位の血氣であつたに違ひはない若しも眞實その苦學の目的如何なんて問ふ者あるも返答は唯漠然たる議論ばかり醫師の塾であるから政治談は餘り流行せず國の開鎖論を云へば固より開國なれども甚だしく之を爭ふ者もなく唯當の敵は漢法醫で醫者が憎ければ儒者までも憎くなつて何でも蚊でも支那流は一切打拂ひと云ふ

ことは何處となく定まつて居たやうだ儒者が經史の講釋しても聽聞しやうと云ふ者もなく漢學書生と見れば唯可笑しく思ふのみ殊に漢醫書生は之を笑ふばかりでなく之を罵詈して少しも許さず緒方塾の近傍中ノ島に花岡と云ふ漢醫の大家があつて其塾の書生は孰れも福生と見え服裝も立派で中々以て吾々蘭學生の類でない每度往來に出逢ふて固より言葉も交へず互に睨合ふて行違ふ其跡で「彼の樣ア如何だい着物ばかり綺麗で何をして居るんだ空々寂々チンプンカンの講釋を聞て其中で古く手垢の附てる奴が塾長だ、こんな奴等が二千年來垢染みた傷寒論を土產にして國に歸て人を殺すとは恐ろしいぢやないか今に見ろ彼奴等を根絶やしにして呼吸の音を止めて遣るから」なんてワイ／＼云たのは每度の事であるが是れとても此方に如斯と云ふ成算も何もない唯漢法醫流の無學無術を罵倒して蘭學生の氣焰を

吐くばかりの事である兎に角に當時緒方の書生は十中の七八目的なしに苦學した者であるが其目的のなかつたのが却て仕合で江戸の書生よりも能く勉强が出來たのであらうソレカラ考へて見ると今日の書生にしても餘り學問を勉强すると同時に始終我身の行先ばかり考へて居るやうでは修業は出來なからうと思ふ左ればと云て只迂濶に本ばかり見て居るのは最も宜しくない、宜しくないとは云ひながら又始終今も云ふ通り自分の身の行末のみ考へて如何したらば立身が出來るだらうか、如何したらば金が手に這入るだらうか、立派な家に住むことが出來るだらうか、如何すれば旨い物を喰ひ好い着物を着られるだらうかと云ふやうな事にばかり心を引かれて齷齪勉强すると云ふことでは決して眞の勉强は出來ないだらうと思ふ就學勉强中は自から靜にして居らなければならぬと云ふ理屈が玆に出て來やうと思ふ

大阪を去て江戸に行く

私が大阪から江戸へ來たのは安政五年二十五歳の時である同年江戸の奥平の邸から御用があるから來いと云て私を呼に來た、それは江戸の邸に岡見彥曹と云ふ蘭學好の人があつて此人は立派な身分のある上士族で如何かして江戸藩邸に蘭學の塾を開きたいと云ふので樣々に周旋して書生を集めて原書を讀む世話をして居た所で奥平家が私を其教師に使ふので其前松木弘安杉亨二と云ふやうな學者を雇ふて居たやうな譯けで私が大阪に居ると云ふことが分たものだから他國の者を雇ふことはない藩中にある福澤を呼べと云ふことになつてソレで私を呼びに來たので其時江戸詰の家老には奥平壹岐が來て居る壹岐と私との關係に就ては私は自から自慢をしても宜いことがある、

是れは如何しても惡感情がなければならぬ筈、衝突がなければならぬ筈、けれども私は其人と一寸とも戰たことがない彼は私を敵視し愚弄して居ると云ふことは長崎を出た時の樣でチヤント分つて居る長崎を立つ時に「貴樣は中津に歸れ、歸たら誰に此手紙を渡せ誰に斯う傳言せよ」と命ずるからへイ〳〵と畏りながら心の中では舌を出して馬鹿言へ乃公は國に歸りはせぬぞ江戸に行くぞと云はぬばかりに席を蹴立てゝ出たことも後になれば先方でも知て居る、けれども其後私は毎度本人に逢ふて假初にも怨言を云た事のない所ではない態と舊恩を謝すると云ふ趣ばかり裝ふて居る中に又もや其大切な原書を盜寫したこともある先方も惡ければ此方も十分惡いけれども唯私が其事を人に語らず顏色にも見せずに御家老樣と尊敬して居たから所謂國家老のお坊さんで今度私を江戸に呼寄せる事に就ても家老に異議なく直に決して幸であつたが實を申せば壹岐よりも私の方が却て罪が深いやうだ

大阪から江戸に來るに就ては何は扨置き中津に歸て一度母に逢ふて別を告げて來ませうと云ふので中津に歸た其時は虎列拉の眞盛りで私の家の近處まで病人だらけバタ〳〵死にました其流行病最中船に乘て大阪に着て暫時逗留ソレカラ江戸に向て出立と云ふことにした所が凡そ藩の公用で勤番するに私などの身分なれば道中並に在勤中、家來を一人呉れるのが定例で今度も私の江戸勤番に付て家來一人振の金を渡して呉れた、けれども家來なんぞと云ふことは思ひも寄らぬ事で何も要らぬ、けれども玆に旅費がある待て〳〵塾中に誰か江戸に行きたいと云ふ者はないか江戸に行きたければ連れて行くが如何だ實は斯う云ふ譯けで金はあるぞと云ふと卽席にどうぞ連れて行て呉

れと云たが岡本周吉即ち古川節藏である(廣島の人)「よし連れて行て遣らう連れて行くが君は飯を炊かなければならぬが宜しいか江戸へ行けば米もあれば長屋もある鍋釜も貸して吳れるが本當の家來を止めにすれば飯炊がない其代に連れて行くのだが如何だ」「飯を炊く位の事は何でもない飯を炊かう」「それぢや一緒に來い」と云て夫れから私の荷物は同藩の人に賴んで道連は私と岡本、もう一人備中の者で原田磊藏と云ふ矢張り緒方の塾生都合三人の道中で勿論歩く其時は丁度十月下旬で少々寒かつたが小春の時節一日も川止など云ふ災難に遇はず滯ほりなく江戸に着て先づ木挽町汐留の奧平屋敷に行た所が鐵砲洲に中屋敷がある其處の長屋を貸すと云ふので早速岡本と私と其長屋に住込で兩人自炊の世帶持になつた夫れから同行の原田は下谷練塀小路の大醫大槻俊齋先生の處へ入込だ江戸へ參れば知己朋友は幾人も居て段々面白くなつて來た

扨私が江戸に參て鐵砲洲の奧平中屋敷に住て居ると云ふ中に藩中の子弟が三人五人づゝ學びに來るやうになり又他から五六人も來るものが出來たので其子弟に敎授して居たが前にも云ふ通り大阪の書生は修業する爲に江戸に行くのではない行けば敎へに行くのだと云ふ自から自負心があつた私も江戸に來て見た處で全體江戸の蘭學社會は如何云ふものであるか知りたいものだと思て居る中に或る日島村鼎甫の家に尋ねて行たことがある勿論緒方門下の醫者で江戸に來て蘭書の飜譯などして居た私も甚だ能く知て居るので尋ねて參れば何時も學問の話ばかりで其時に主人は生理書の飜譯最中その原書を持出して云ふには此文の一節が如何しても分らないと云ふ夫れから私が之を見た所が成程解し惡い所だ依て主人に向て是れは外の朋友に

も相談して見たかと云へばイヤもう親友誰々四五人にも相談をして見たが如何しても分らぬと云ふから面白いソレぢや僕が之を解して見せやうと云て本當に見た所が中々六かしい凡そ半時間ばかりも無言で考へた所でチャント分た一體是れは斯う云ふ意味であるが如何だ物事は分て見ると造作のないものだと云て主客共に喜びました何でも其一節は光線と視力との關係を論じ蠟燭を二本點けて其燈光をどうかすると影法師が如何とかなると云ふ隨分六かしい處で島村の飜譯した生理發蒙と云ふ譯書中にある筈です此一事で私も竊に安心して先づ是れならば江戸の學者も左まで恐れることはないと思ふたことがある

それから又原書の不審な處を諸先輩に質問して竊に其力量を試したこともある大阪に居る中に毎度人の讀損ふた處か人の讀損ひさうな處を選出してさうして其れを私は分らない顏して不審を聞きに行くと每度の事で學者先生と稱して居る人が讀損ふて居るから此方は却て滿足だ實は欺て人を試驗するやうなもので德義上に於て相濟まぬ罪なれども壯年血氣の熱心自から禁ずることが出來ない畢竟私が大阪に居る間は同窓生と共に江戸の學者を見下だして取るに足らないものだと斯う思ふて居ながらも只ソレを空に信じて宜い氣になつて居ては大間違が起るから大抵江戸の學者の力量を試さなければならぬと思て惡いとは知りながら試驗を遣て見たのですソコデ以て蘭學社會の相場は大抵分て先づ安心ではあつたが扨又此處に大不安心な事が生じて來た私が江戸に來た其翌年即ち安政六年五國條約と云ふものが發布になつたので橫濱は正しく開けた計りの處ソコデ私は橫濱に見物に行た其時の橫濱と云ふものは外國人がチラホラ來て居

る丈けで掘立小屋見たやうな家が諸方にチョイ〳〵出來て外國人が其處に住で店を出して居る其處へ行て見た所が一寸とも言葉が通じない此方の云ふことも分らなければ彼方の云ふことも勿論分らない店の看板も讀めなければビンの貼紙も分らぬ何を見ても私の知て居る文字と云ふものはない英語だか佛語だか一向分らない居留地をブラ〳〵歩く中に獨逸人でキニッフルと云ふ商人の店に打當た其商人は獨逸人でこそあれ蘭語蘭文が分る此方の言葉はロクに分らないけれども蘭文を書けばどうか意味が通ずると云ふのでソコで色々な話をしたり一寸と買物をしたりして江戸に歸て來た御苦勞な話でソレも屋敷に門限があるので前の晩の十二時から行て其晩の十二時に歸たから丁度一晝夜歩いて居た譯けだ

横濱から歸て私は足の疲れではない實に落膽して仕舞た是れは〳〵どうも仕方がない今まで數年の間死物狂ひになつて和蘭の書を讀むことを勉強した、其勉強したものが今は何にもならない商賣人の看板を見ても讀むことが出來ない左りとは誠に詰らぬ事をしたわいと實に落膽して仕舞た、けれども決して落膽して居られる場合でない彼處に行れて居る言葉書いてある文字は英語か佛語に相違ない、所で今世界に英語の普通に行れて居ると云ふことは豫て知て居る、何でもあれは英語に違ひない今我國は條約を結んで開けかゝつて居る左すれば此後は英語が必要になるに違ひない洋學者として英語を知らなければ迚も何にも通ずることが出來ない此後は英語を讀むより外に仕方がないと横濱から歸た翌日だ、一度は落膽したが同時に又新に志を發して夫れから以來は一切萬事英語と覺悟を極めて扨其英語を學ぶと云ふことに就て如何して宜か取付端がない、江戸中に何處で英語を敎

へて居ると云ふ所のあらう譯けもない、けれども段々聞て見ると其時に條約を結ぶと云ふが爲めに長崎の通詞の森山多吉郎と云ふ人が江戸に來て幕府の御用を勤めて居る其人が英語を知て居ると云ふ噂を聞出したからソコデ森山の家に行て習ひませうと斯う思ふて其森山と云ふ人は小石川の水道町に住居して居たから早速其家に行て英語教授の事を頼入ると森山の云ふに昨今御用が多くて大變に忙しいけれども折角習はうと云ふならば教へて進ぜやう就ては毎日出勤前朝早く來いと云ふことになつて其時私は鐵砲洲に住て居て鐵砲洲から小石川まで頓て二里餘もありませう毎朝早く起きて行く所が今日はもう出勤前だから又明朝來て呉れ明くる朝早く行くと人が來て居て行かないと云ふ如何しても教へて呉れる暇がないソレは森山の不深切と云ふ譯けではない條約を結ばうと云ふ時だから中々忙くて實際

に教へる暇がありはしない、さうするとこんなに毎朝來て何も教へることが出來んでは氣の毒だ晩に來て呉れぬかと云ふソレぢや晩に參りませうと云て今度は日暮から出掛けて行く、あの往來は丁度今の神田橋一橋外の高等商業學校のある邊で素と護持院ヶ原と云ふ大きな松の樹などが生繁つて居る恐ろしい淋しい處で追剝でも出さうな處だ其處を小石川から歸途に夜の十一時十二時ごろ通る時の怖さと云ふものは今でも能く覺えて居る、所が此夜稽古も矢張り同じ事で今晩は客があるイヤ急に外國方(外務省)から呼びに來たから出て行かなければならぬと云ふやうな譯けで頓と仕方がない凡そ其處に二月か三月通ふたけれどもどうにも暇がない迚もこんな事では何も覺えることも出來ない加ふるに森山と云ふ先生も何も英語を大層知て居る人ではない漸く少し發音を心得て居ると云ふ位迚も是れは仕方ないと

餘儀なく斷念

其前に私が横濱に行た時にキニッフルの店で薄い蘭英會話書を二冊買て來たソレを獨で讀とした所で字書がない英蘭對譯の字書があれば先生なしで自分一人で解することが出來るからどうか字書を欲いものだと云た所で横濱に字書などを賣る處はない何とも仕方がない、所が其時に九段下に蕃書調所と云ふ幕府の洋學校がある其處には色色な字書があると云ふことを聞出したから如何かして其字書を借りたいものだ借りるには入門しなければならぬ、けれども藩士が出拔けに公儀(幕府)の調所に入門したいと云ても許すものでない藩士の入門願には其藩の留守居と云ふものが願書に奧印をして然る後に入門を許すと云ふ夫れから藩の留守居の處に行て奧印の事を頼み私は社杯を着て蕃書調所に行て入門を願ふた其時には箕作麟祥のお祖父さんの箕作阮甫と云ふ人が調所の頭取で早速入門を許して呉れて入門すれば字書を借ることが出來る直に拜借を願ふて英蘭對譯の字書を手に請取て通學生の居る部屋があるから其處で暫く見て夫れから懷中の風呂敷を出して其字書を包で歸らうとするとソレはならぬ此處で見るならば許して苦しくないが家に持歸ることは出來ませぬと其係の者が云ふ、こりや仕方がない鐵砲洲から九段阪下まで毎日字引を引きに行くと云ふことは迚も間に合ぬ話だ、ソレも漸く入門してたつた一日行た切で斷念

扨如何したら宜からうかと考へた所で段々横濱に行く商人がある何か英蘭對譯の字書はないかと頼んで置た所がホルトップと云ふ英蘭對譯發音付の辭書一部二冊物がある誠に小さな字引だけれども價五兩と云ふ夫から私は奧平の藩に歎願して買取て貰てサアもう是れで

宜しい此字引さへあればもう先生は要らないと自力研究の念を固くして唯其字引と首引で毎日毎夜獨り勉强又或は英文の書を蘭語に飜譯して見て英文に慣れる事ばかり心掛けて居ました

そこで自分の一身は爾う定めた所で是れは如何しても朋友がなくてはならぬ私が自分で不便利を感ずる通りに今の蘭學者は悉く不便を感じて居るに違ひない迚も今まで學だのは役に立たない何でも朋友に相談をして見やうと斯う思ふたが此事も中々易くない、と云ふのは其時の蘭學者全體の考は私を始として皆數年の間刻苦勉强した蘭學が役に立たないから丸で之を棄てゝ仕舞て英學に移らうとすれば新に元の通りの苦みをもう一度しなければならぬ誠に情ない、つらい話である譬へば五年も三年も水練を勉强して漸く泳ぐことが出來るやうになつた所で其水練を罷めて今度は木登りを始めやうと云ふのと

同じ事で以前の勉强が丸で空になると斯う考へたものだから如何にも決斷が六かしいソコデ學友の神田孝平に面會して如何しても英語を遣らうぢやないかと相談を掛けると神田の云ふにイヤもう僕も疾うから考へて居て實は少し試みた、試みたが如何にも取付端がない何處から取付て宜いか實に譯けが分らない併し年月を經れば何か英書を讀むと云ふ小口が立つに違ひないが今の處では何とも仕方がないマア君達は元氣が宜いから遣て呉れ大抵方角が付くと僕も屹と遣るから、ダガ今の處では何分自分で遣らうと思はないと云ふ夫れから番町の村田藏六(後に大村益次郎)の處へ行て其通りに勸めた所が是れは如何しても遣らぬと云ふ考で神田とは丸で説が違ふ「無益な事をするな僕はそんな物は讀まぬ要らざる事だ、何も、そんな困難な英書を辛苦して讀むがものはないぢやないか必要な書は皆和蘭人が飜譯するか

ら其飜譯書を讀めばソレで澤山ぢやないか」と云ふ「成程それも一說だがけれども和蘭人が何も角も一々飜譯するものぢやない僕は先頃橫濱に行て呆れて仕舞た此鹽梅では迚も蘭學は役に立たぬ是非英書を讀まなくてはならぬではないかと勸むれども村田は中々同意せず「イヤ讀まぬ僕は一切讀まぬ遣るなら君達は遣り給へ僕は必要があれば蘭人の飜譯したのを讀むから構はぬ」と威張て居る是れは迚も仕方がないと云ふので今度は小石川に居る原田敬策に其話をすると原田は極熱心で「何でも遣らう誰がどう云ふても構はぬ是非遣らう」と云ふから「爾うかソレは面白いそんなら二人で遣らう、どんな事があつても遣遂げやうではないか」と云ふので原田とは極說が合ふて愈よ英書を讀むと云ふ時に長崎から來て居た子供があつて其子供が英語を知て居ると云ふので、そんな子供を呼で來て發音を習ふたり又或は漂流人で

折節歸るものがある長く彼方へ漂流して居た者が開國になつて船の便があるものだから折節歸る者があるからそんな漂流人が着くと其宿屋に訪ねて行て聞たこともある其時に英學で一番六かしいと云ふのは發音で私共は何も其意味を學ばうと云ふのではない只スペルリングを學ぶのであるから子供でも宜ければ漂流人でも構はぬ爾う云ふ者を捜し廻ては學んで居ました始めは先づ英文を蘭文に飜譯することを試み一字々々字を引てソレを蘭文に書直せばちやんと蘭文になつて文章の意味を取ることに苦勞はない唯その英文の語音を正しくするのに苦んだが是れも次第に緒が開けて來れば夫れほどの難澁でもなし詰る處は最初私共が蘭學を捨てゝ英學に移らうとするときに眞實に蘭學を捨てゝ仕舞ひ數年勉強の結果を空うして生涯二度の艱難辛苦と思ひしは大間違の話で實際を見れば蘭と云ひ英と云ふも

等しく横文にして其文法も略相同じければ蘭書讀む力は自から英書にも適用して決して無益でない水を泳ぐと木に登ると全く別のやうに考へたのは一時の迷であつたと云ふことを發明しました

始めて亞米利加に渡る

ソレカラ私が江戸に來た翌年即ち安政六年冬徳川政府から亞米利加に軍艦を遣ると云ふ日本開闢以來未曾有の事を決斷しました扨その軍艦と申しても至極小さなもので蒸氣は百馬力ヒュルブマシーネと申して港の出入に蒸氣を焚くばかり航海中は唯風を便りに運轉せねばならぬ二三年前和蘭から買入れ價は小判で二萬五千兩、船の名を咸臨丸と云ふ其前安政二年の頃から幕府の人が長崎に行て蘭人に航海術を傳習して其技術も漸く進歩したから此度使節がワシントンに行くに付き日本の軍艦もサンフランシスコまで航海と斯う云ふ譯けで幕議一決艦長は時の軍艦奉行木村攝津守これに隨從する指揮官は勝麟太郎、運用方は佐々倉桐太郎、濱口與右衛門、鈴藤勇次郎、測量は小野友五郎、伴鐵太郎、松岡磐吉、蒸氣は肥田濱五郎、山本金次郎、公用方には吉岡勇平、小永井五八郎、通辯官は中濱萬次郎、少年士官には根津欽次郎、赤松大三郎、岡田井藏、小杉雅之進と醫師二人、水夫火夫六十五人、艦長の從者を併せて九十六人、船の割にしては多勢の乘組人でありしが此航海の事に就ては色々お話がある

今度咸臨丸の航海は日本開闢以來初めての大事業で乘組士官の面々は固より日本人ばかりで事に當ると覺悟して居た處が其時亞米利加の甲比丹ブルックと云ふ人が太平洋の海底測量の爲めに小帆前船へネモコバラ號に乘て航海中薩摩の大島沖で難船して幸に助かり横濱

に來て德川政府の保護を受けて甲比丹以下士官一人醫師一人水夫四五人久しく滯留の折柄日本の軍艦がサンフランシスコに航海と聞き幸便だから之に乘て歸國したいと云ふので其事が定まらうとすると日本の乘組員は米國人と一緒に乘るのは厭だと云ふ何故かと云ふに若し其人達を連れて歸れば却て銘々共が亞米利加人に連れて行て貰たやうに思はれて日本人の名譽に係るから乘せないと剛情を張る夫れ是れで政府も餘程困た樣子でありしが到頭ソレを無理壓付けにして同船させたのは政府の長老も內實は日本士官の伎倆を覺束なく思ひ一人でも米國の航海士が同船したらばマサカの時に何かの便利にならうと云ふ老婆心であつたと思はれる

艦長木村攝津守と云ふ人は軍艦奉行の職を奉じて海軍の長上官であるから身分相當に從者を連れて行くに違ひない夫れから私はどうも其船に乘て亞米利加に行て見たい志はあるけれども木村と云ふ人は一向知らない去年大阪から出て來た計りでそんな幕府の役人などに緣のある譯けはない、所が幸に江戶に桂川と云ふ幕府の蘭家の侍醫がある其家は日本國中蘭學醫の總本山とでも名を命けて宜しい名家であるから江戶は扨置き日本國中蘭學社會の人で桂川と云ふ名前を知らない者はないソレ故私なども江戶に來れば何は扨置き桂川の家には訪問するので度々其家に出入して居る其桂川の家と木村の家とは親類——極近い親類である夫れから私は桂川に賴で如何かして木村さんの御供をして亞米利加に行きたいが紹介して下さることは出來まいかと懇願して桂川の手紙を貰て木村の家に行て其願意を述べた所が木村では卽刻許して呉れて連れて行て遣らうと斯う云ふことになつた、と云ふのは案ずるに其時の世態人情に於て外國航海など云へ

ば開闢以來の珍事と云はうか、寧ろ恐ろしい命掛けの事で木村は勿論軍艦奉行であるから家來はある、あるけれども其家來と云ふ者も餘り行く氣はない所に假初にも自分から進で行きたいと云ふのであるから實は彼方でも妙な奴だ幸と云ふ位なことであつたらうと思ふ直に許されて私は御供をすることになつた

咸臨丸の出帆は萬延元年の正月で品川沖を出て先づ浦賀に行た同時に日本から亞米利加に使節が立て行くので亞米利加から其使節の迎船が來たポーハタンと云ふ其軍艦に乘て行くのであるが其ポーハタンは後から來ることになつて咸臨丸は先に出帆して先づ浦賀に泊た浦賀に居て面白い事がある船に乘組で居る人は皆若い人でもう是れが日本の訣別であるから浦賀に上陸して酒を飲まうではないかと云出した者がある何れも同說で夫れから陸に上て茶屋見たやうな處に行て散々酒を飲でサア船に歸ると云ふ時に誠に手癖の惡い話で其茶屋の廊下の棚の上に嗽茶碗が一つあつた是れは船の中で役に立ちさうな物だと思て一寸と私が夫を盜で來た其時は冬の事でサア出帆した所が大嵐毎日々々の大嵐中々茶碗に飯を盛て本式に喫べるなんと云ふとは容易な事ではない、所が私の盜だ嗽茶碗が役に立て其中に一杯飯を入れて其上に汁でも何でも皆掛けて立て喰ふ誠に世話のない話で大層便利を得て亞米利加まで行て歸りの航海中も毎日用ひて到頭日本まで持て歸て久しく私の家にゴロチャラして居た、程經て聞けば其浦賀で上陸して飮食ひした處は遊女屋だと云ふ夫れは其當時私は知らなかつたがさうして見ると彼の大きな茶碗は女郎の嗽茶碗であつたらう思へば穢ないやうだが航海中は誠に調法唯一の寶物であつたのが可笑しい

扨それから船が出てずつと北の方に乗出した其咸臨丸と云ふのは百馬力の船であるから航海中始終石炭を焚くと云ふことは出來ない只港を出るとき這入るときに焚く丈けで沖に出れば丸で帆前船、と云ふのは石炭が積まれますまい石炭がなければ帆で行かなければならぬ其帆前船に乘て太平海を渡るのであるからそれは〳〵毎日の暴風で艀船が四艘あつたが激浪の爲めに二艘取られて仕舞ふた其時は私は艦長の家來であるから艦長の爲めに始終左右の用を辨じて居た艦長は船の艫の方の部屋に居るので或る日朝起きていつもの通り用を辨じませうと思て艫の部屋に行た所が其部屋に弗が何百枚か何千枚か知れぬ程散亂して居る如何したのかと思ふと前夜の大嵐で袋に入れて押入の中に積上げてあつた弗定めし錠も卸してあつたに違ひないが劇しい船の動搖で弗の袋が戸を押破て外に散亂したものと見える是れは大變な事と思て直に引返して舳の方に居る公用方の吉岡勇平に其次第を告げると同人も大に驚き場所に駈付け私も加勢して其弗を拾集めて袋に入れて元の通り戸棚に入れたことがあるが元來船中にこんな事の起る其次第は當時外國爲替と云ふ事に就て一寸とも考へがないので旅をすれば金が要る金が要れば金を持て行くと云ふ極簡單な話で何萬弗だか知れない弗を袋などに入れて艦長の部屋に藏めて置た其金が嵐の爲めに溢れ出たと云ふやうな奇談を生じたのである夫れでも大抵四十年前の事情が分りませう今ならば一向譯けはない爲替で一寸と送て遣れば何も正金を船に積で行く必要はないが商賣思想のない昔の武家は大抵こんなものである航海中は毎日の嵐で始終船中に波を打上げる今でも私は覺えて居るが甲板の下に居ると上に四角な窓があるので船が傾くと其窓から大洋の立浪が能く見

えるそれは大層な波で船體が三十七八度傾くと云ふことは毎度の事であつた四十五度傾くと沈むと云ふけれども幸に大きな災もなく只其航路を進で行く、進で行く中に何も見えるものはない其中で以て一度帆前船に遇ふたことがあつたソレは亞米利加の船で支那人を乘せて行くのだと云ふ其船を一艘見た切り外には何も見ない

所で三十七日掛て桑港に着た、航海中私は身體が丈夫だと見えて怖いと思ふたことは一度もない始終私は同船の人に戯れて「是れは何の事はない生れてからマダ試みたことはないが牢屋に這入て毎日毎夜大地震に遇て居ると思へば宜いぢやないか」と笑て居る位な事で船が沈まうと云ふことは一寸とも思はない、と云ふのは私が西洋を信ずるの念が骨に徹して居たものと見えて一寸とも怖いと思たことがない夫れから途中で水が乏しくなつたので布哇に寄るか寄らぬかと云ふ説が起た辛抱して行けば布哇に寄らないでも間に合ふであらうが極用心をすれば寄港して水を取て行く如何しやうかと云ふが遂に布哇に寄らずに桑港に直航と斯う決定して夫れから水の儉約だ何でも飲むより外は一切水を使ふことはならぬと云ふことになつた、所で其時に大に人を感激せしめた事がある、と云ふのは船中に亞米利加の水夫が四五人居ました其水夫等が動もすると水を使ふので甲比丹ブルックにどうも水夫が水を使ふて困ると云たら甲比丹の云ふには水を使ふたら直に鐵砲で撃殺して呉れ是れは共同の敵ぢやから説諭も要らなければ理由を質問するには及ばぬ即刻銃殺して下さいと云ふ理屈を云へば其通りに違ひない夫れから水夫を呼で水を使へば鐵砲で撃殺すから爾う思へと云ふやうな譯けで水を儉約したから如何やら斯うやら水の盡きると云ふことがなくて同勢合せて九十六人無事に

亞米利加に着た船中の混雜は中〳〵容易ならぬ事で水夫共は皆筒袖の着物は着て居るけれども穿物は草鞋だ草鞋が何百何千足も貯へてあつたものと見える船中はもうビシヨ〳〵でカラリとした天氣は三十七日の間に四日か五日あつたと思ひます誠に船の中は大變な混雜であつた(桑港着船の上艦長の奮發で水夫共に長靴を一足づゝ買て遣て夫れから大に體裁が好くなつた)

併し此航海に就ては大に日本の爲めに誇ることがある、と云ふのは抑も日本の人が始めて蒸氣船なるものを見たのは嘉永六年、航海を學び始めたのは安政二年の事で、安政二年に長崎に於て和蘭人から傳習したのが抑も事の始まりで其業成て外國に船を乘出さうと云ふことを決したのは安政六年の冬即ち目に蒸氣船を見てから足掛け七年目、航海術の傳習を始めてから五年目にして夫れで萬延元年の正月に出帆しやうと云ふ其時少しも他人の手を藉らずに出掛けて行かうと決斷した其勇氣と云ひ其伎倆と云ひ是れだけは日本國の名譽として世界に誇るに足るべき事實だらうと思ふ前にも申した通り航海中は一切外國人の甲比丹ブルックの助力は假らないと云ふので測量するにも日本人自身で測量する亞米利加の人も亦自分で測量して居る互に測量したものを後で見合せる丈けの話で決して亞米利加人に助けて貰ふと云ふことは一寸でもなかつたソレ丈けは大に誇ても宜い事だと思ふ今の朝鮮人支那人東洋全體を見渡した所で航海術を五年學で太平海を乘越さうと云ふ其事業其勇氣のある者は決してありはしない、ソレ所ではない昔〳〵露西亞のペートル帝が和蘭に行て航海術を學だと云ふがペートル大帝でも此事は出來なからう假令ひ大帝は一種絶倫の人傑なりとするも當時の露西亞に於て日本人の如く大膽にして且

つ學問思想の緻密なる國民は容易になからうと思はれる

海上恙なく桑港に着た、着くやいなや土地の重立たる人々は船まで來て祝意を表し之を歡迎の始めとして陸上の見物人は黒山の如し次で陸から祝砲を打つと云ふことになつて彼方から打てば咸臨丸から應砲せねばならぬと此事に就て一奇談がある勝麟太郎と云ふ人は艦長木村の次に居て指揮官であるが至極船に弱い人で航海中は病人同樣自分の部屋の外に出ることは出來なかつたが着港になれば指揮官の職として萬端差圖する中に彼の祝砲の事が起た所で勝の説にソレは迚も出來る事でないナマジ應砲などして遣り傷ふよりも此方は打たぬ方が宜いと云ふ、爾うすると運用方の佐々倉桐太郎は「イヤ打てないことはない乃公が打て見せる」「馬鹿云へ貴樣達に出來たら乃公の首を遣る」と冷かされて佐々倉はいよ〳〵承知しない何でも應砲して見せると云ふので夫れから水夫共を差圖して大砲の掃除火藥の用意して砂時計を以て時を計り物の見事に應砲が出來たサア佐々倉が威張り出した首尾克く出來たから勝の首は乃公の物だ併し航海中用も多いから暫く彼の首を當人に預けて置くと云て大に船中を笑はした事がある兎も角もマア祝砲だけは立派に出來た

ソコで無事に港に着たらばサアどうも彼方の人の歡迎と云ふものはそれは〳〵實に至れり盡せり此上の仕樣がないと云ふ程の歡迎亞米利加人の身になつて見れば亞米利加人が日本に來て始めて國を開いたと云ふ其日本人がペルリの日本行より八年目に自分の國に航海して來たと云ふ譯けであるから丁度自分の學校から出た生徒が實業に就て自分と同じ事をすると同樣乃公が其端緒を開いたと云はぬ計の心持であつたに違ひない、ソコでもう日本人を掌の上に乗せて不自由

をさせぬやうに不自由をさせぬやうにとばかり桑港に上陸するや否や馬車を以て迎ひに來て取敢へず市中のホテルに休息と云ふ其ホテルには市中の役人か何かは知りませぬが市中の重立た人が雲霞の如く出掛けて來た樣々の接待饗應ソレカラ桑港の近傍のメールアイランドと云ふ處に海軍港附屬の官舍を咸臨丸一行の止宿所に貸して呉れ、船は航海中なか〳〵損所が出來たからとて船渠に入れて修覆をして呉れる逗留中は勿論彼方で賄も何もそつくり爲て呉れる筈であるが水夫を始め日本人が洋食に慣れない矢張り日本の飯でなければ喰へないと云ふので自分賄と云ふ譯けにした所が亞米利加の人は兼て日本人の魚類を好むと云ふことを能く知て居るので毎日々々魚を持て來て呉れたり或は日本人は風呂に這入ることが好きだと云ふので毎日風呂を立てゝ呉れると云ふやうな譯け所でメールアイランドと云ふ處は町でないものですから折節今日は桑港に來いと云て誘ふ、夫れから船に乘て行くとホテルに案內して饗應すると云ふやうな事が每度ある、所が此方は一切萬事不慣れで例へば馬車を見ても始めてだから實に驚いた其處に車があつて馬が付て居れば乘物だと云ふことは分りさうなものだが一見したばかりでは一寸と考が付かぬ、所で戶を開けて這入ると馬が駈出す成程是れは馬の挽く車だと始めて發明するやうな譯け、何れも日本人は大小を挾して穿物は麻裏草履を穿て居るソレでホテルに案內されて行て見ると絨氈が敷詰めてある其絨氈はどんな物かと云ふと先づ日本で云へば餘程の贅澤者が一寸四方幾干と云て金を出して買ふて紙入にするとか莨入にするとか云ふやうなソンナ珍らしい品物を八疊も十疊も恐ろしい廣い處に敷詰めてあつて其上を靴で歩くとは扨々途方もない事だと實に驚いたけ